室内所傳の儀軌の上にも二儀とか兩懺とか色々なこともあるけれども、佛祖正傳の懺悔の文があるに依て其れを唱へるがよろしぞと仰せられたのである。其の懺悔の文といふのが卽ち此の我昔所造といふ七言四句の偈文で、これは元來華嚴經の行願品にある偈であつて、卽ち先佛の護持せられたのである。それを歷代の祖師が嫡々相承せられて今日まで傳はつたのであるが、文の意は、「我れ昔より造る所の諸〳〵の惡業は皆始よりの貪瞋痴に由る、」昔といふは卽ち無始劫の昔からといふことで、無始といふのはじめなしと書いたのであるから、何時からと云ふ限りも無く造り重ねた諸〳〵の惡業罪過は、皆何時からともなく働いてある貪瞋痴の三毒に由て起つたのであるといふ。

貪瞋痴といふは貪はむさぼる瞋はいかる、吾々お互ひ眼があるからには色が見える耳があるに依つて聲が聞える。色が見えれば彼は綺麗此は醜穢いと云ふ別が分る、聲が聞えれば彼は好い音此は厭な響と知れる。そこで氣に入つた色聲ならば之をもつと

見たいもつと聞きたいと貪り求める心が起る、それが卽ち貪慾と名けられるので、强盗を働くやうになるのも其の本は此の氣に入つたものをもつと見たいもつと聞きたいもつと食べたいもつと着たいといふ一念から起るのである。さて又これとは反對に、氣に入らない物事に合へばもう見たくもない聞きたくもないと厭ひ嫌ふ心が起る。然るに幾ら厭ひ嫌つても眼があるから見える耳があるから聞える、そこで忌々しいことである、何とかして見えないやうにしたい聞えないやうにしたいと云ふ心が起る。それが卽ち瞋りの心で、遂には己れの氣に入らぬからと云つて人を殺すやうになるのも其本は唯この瞋りであるから、之を瞋意と名けて三毒の隨一に數へてある。然るに此の貪慾も瞋意も、畢竟するに物事の道理が明らかに分らぬからのことである。そこで其の物事の道理の明らかに分らぬのを愚痴と名けられたが、凡そ物事の道理の分らぬといふにも程度があるけれども、因果の道理の分らぬのが全く愚痴の根源である。因

果の道理さへ明らかに分れば、貪るべからざるものを貪る心は起らず、瞋るべからざることに瞋りは起らぬ。手近く申さば幾ら欲しいと思ふたからとても、これまでの因果であらうと諦めがついたなら貪慾には落入らないで濟む、どれほど忌々しいと思ふても、やはりこれまでの因縁であらうと諦めがついたなら、瞋意は起らぬのである。すなはち因果の道理さへ明らかに分れば、貪慾も瞋意も乃至愚痴も皆無くなるのであるけれども、今までは因果の道理と云ふやうなことを聞いたことも無かつたに依て、貪瞋痴の三毒を逞しくして諸〳〵の悪業をも造り重ねたことであつたが、今といふ今は沁々と先非後悔に及ぶことであるといふ意味を、我昔所造諸悪業皆由無始貪瞋痴と仰せられた。

さて次の句に「從身口意之所生」とある、これは其の三毒といふも悪業といふも皆是身と口と意とより生ずる所であるといふので、前の句に申した通り貪慾と瞋意と愚痴

との三つが其の根本に相違ないけれども、之を業卽ちしわざに顯はして罪過を造るには、三業と申して身と口と意との三つに掛けねばならぬ。此中で意といふ一つだけは全く前の貪瞋痴の三つを約めて云ふたまでのことであるけれども、強て分けて申せば前の貪瞋痴と申したのは總體の上に於て欲しいとか忌々しいとか思ふたまでのことである。然るに其の欲しいといふ心を遂げやうと云ふては、更にどうして彼を己れの手に入れやうかあゝして斯うしてと考へるのが卽ち意業と申すもので、それから其れを手に入れるに就ては口先まで虚言を言ふたり欺いたり、腹が立つといふに就ては悪口を云ふたり嘲つたりするのが卽ち口業、さて又貪るに就ては口で虚言を言ふばかりではなく、或は手足を動かしたり眼鼻を用ゐたりする、腹が立つと云ふにつけても或は打擲したとか斬殺したとか云ふやうなことにもなるのが卽ち身業である。斯様なわけで身と口と意との三つの上で罪過を造る、これに身三口四意三と申すことがあつて、

身ですることが三つ、口で云ふことが四つ、意で思ふことが三つ、これを合せて十惡と云ふのであるが、これと反對に其の十惡を止めさへすれば卽ち十善となる。然し其の本は後の十重禁戒のところでお話する事にして、さて愈第四句目が卽ち懺悔の言葉で、「一切我今皆慚悔」とある。これは今更申すまでもなく、前に申した罪過を我れ今皆懺悔するといふまでのことである。

是の如く懺悔すれば、必ず佛祖の冥助あるなり、心念身儀發露白佛すべし、發露の力罪根をして銷殞せしむるなり。

これは第二章すなはち懺悔の段の結局で、「此の如く懺悔すれば必ず佛祖の冥助あるなり」と云ふは、敢て辯ずるまでもあるまい、但だ冥助といふ二字を考へ損ふて、佛

祖に罪を滅ぼして貰ふやうに思ふてはならぬ。助の字はすけると云ふ字ですけるといふのは其處に本人があつて懺悔をする、それを佛祖が加被護念して謂ゆる障道の因緣の無いやうにお守り下さると云ふまでのことである。卽ち懺悔の正式は心念身儀發露でなければならぬ。已に前にも申した如く、都ての罪業は身口意の三業から生じたものであるに依て之を懺悔するにも亦た身口意の三業に掛ける。卽ち心念と云ふは心に念ふと書いたので、嗚呼これまでは惡かつたと眞實心底から悔いる心が起る、そこで身儀といふは身體の行儀と云ふことで、手を合せたり禮拜したりするやうなこと、發露と云ふはひらきあらはすと書いたので、これまでの罪過を殘らず白狀することであるが、それを宗旨の違ふ所では人間同士の前で其の罪過を自分の覺えのあるだけ皆實際に白狀させる向もあると申すことであるが、今この正傳の趣きに於ては白佛と申して、三世の諸佛に向ひ而かも其の白狀する言葉と云ふても前に申した我昔所造の文を

至心に唱へるだけのことである。そこで心念に身儀に發露と、卽ち身と口と意との三つが揃ふに依て懺悔の儀式が始めて整ふのである。此の佛前懺悔と人前懺悔との差別に就て尤も心得ておかねばならぬのは、人前すなはち人間同士の前で其の事柄を一々白狀するのは甚だ辛いやうでも、人間同士は十のものを八つ位に言ふても昧ますことが出來るかは知らぬけれども、佛前懺悔に至りては冥鑑照々として露ほども昧ますことが出來ぬに依て、最も誠實に謂ゆる至誠心を以てすることが何より肝要である。

さて斯樣に三業相應して、佛祖正傳の儀式の通りに懺悔をすれば、其の發露白佛した力すなはち己れが懺悔した功德利益が、己れを救ひ助けて「罪根を銷殞せしむるなり、」都ての罪業の根源たる無始の貪瞋痴が銷殞と消え失せる、銷はきえる殞はほろぶと云ふ字で、奇麗さつぱりと痕跡も無くなつてしまふことである。これで第二章が終んで次は

第三章、受戒入位

受戒入位の大要は、既に前段にも屢〻申し述べた通りのことで、今更喋々する必要も無いやうになつてゐるが、世の中には隨分滑稽なことを云ふ人も少くない樣子で、受戒を中心とするのは靴を隔てゝ痒を抓くやうなものであるとか、甚しきは懺悔を以て中心とするが好いとか云ふやうな說もあると申すことであるが、受戒入位といふ四字の中で、上の受戒といふ二字だけ眼に附いて、下の入位といふことを見落した故でもあると見える。元來佛法修行の目的は、諸宗各派ともに只此の入位といふ二字であるので、更に通俗に申せば佛の仲間入りをするといふだけのことである。然るに其の佛の仲間入をする方法として、或は念佛入位もあれば、唱題入位もあり、坐禪で入位するものもあれば觀法で入位するのもある。卽ち今曹洞宗の在家化導法に於ては、佛祖正傳の受戒に於て入位すると定められたので、苟くも佛法の大體の解つた人ならば、受戒

が中心であるといふことに疑念も異議も起るべきわけのものでは無い。

さて其の受戒をするに就ては、「何れの戒を受くるも、必ず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり」と仰せられた通り、先づ第一に三歸戒を受けるのは、これは佛法通途の法で、諸宗各派みな同じことである。現に眞宗などは全く無戒の宗旨であるけれども、三歸戒だけは必ず受ける。日蓮宗も法華經を持つのが卽ち別頭本門の戒法で、其外に別に受戒といふことは無い樣子であるけれども、三歸戒は必ず受ける。これが一番に肝要なので、吾々が只この受戒に依て入位が出來るといふのも、全くは此の戒の力である。此の三聚淨戒は、高祖の御訓誨に「梵網經瓔珞經等を見るべし」と仰せられてある。其の瓔珞經に「三寶海に入るには信を以て本と爲し、佛家に在住するには戒を以て本と爲す」と說かせられ、其次に「吾今諸の菩薩の爲めに一切戒の根本を結す」と仰せられて、此の三聚淨戒を說かせられてある。其の順序は、現に曹洞宗で

授けるのとは前後してゐるが「攝善法戒は謂ゆる八萬四千の法門なり、攝衆生戒は謂ゆる慈悲喜捨の化および一切衆生皆安樂を得せしむるなり、攝律儀戒は謂ゆる十波羅夷なり」と仰せられてある。そこで次には其の十波羅夷、卽ち十無盡戒を說かせられた。其の戒法は梵網經と同じことで、只その授受の法をも併せて說かせられてあり、更に「菩薩戒は受法ありて而して捨法なし、犯すことありとも失はず、未來際を盡す」と仰せられ、又「其の受戒の者は、諸佛界菩薩數の中に入り、三劫生死の苦を超過す、是の故に受ることあれば而も犯すことあるも、無戒にして犯さゞるには勝れり、犯すことありとも菩薩と名け、犯すこと無くとも（受戒せざる者をば）外道と名く」とまで斷言せられてある。實に受戒入位の研究に於ては、最も肝要なことであると思ふ。殊に高祖大師は、明らかに「受戒するが如きは、三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり」と斷定して下されたのであるから、何の疑ひも

なく戒師の授けられるまゝに受けさへすれば、「衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る、位大覺に同じうし已る、眞に是れ諸佛の子なり」と、心やすく一生に住位に入るのみでなく、大覺位に入ることが出來るのである。此に衆生佛戒を受くればとばかりあつて、持てばとは云ふてない。高祖のお言葉にも、受戒するが如きはとばかりあつて持戒するが如きはとは仰せられてない。瓔珞經の犯ありとも失せずと云ふにも考へ合せて、佛戒の一得永不失なることを明らめねばならぬことである。

然るに此に一大疑團の横はつてあるのは、曹洞宗出家衆の專門たるべき只管打坐身心脫落といふやうな謂ゆる宗乘と稱する法門と、此の出家在家共通の受戒入位と、甚だ徑庭齟齬するやうに思はれることである。けれどもこれは格外むづかしい問題ではない、畢竟其人の機根と身分との差異から起るまでのことで、謂ゆる只管打坐の宗乘も受戒入位の法門も、結局は本證を證得するまでのことである。そこで本證といふこ

とを研究してみなければならぬが、本證とは讀んで字の如く、もと〳〵からのさとりといふことで、言葉を換へて云へば未來成佛といふことになる。其の未來成佛が宗乘の骨髓であると云ふことは、近くは天桂禪師の驢耳彈琴などを讀んで見れば能くわかる。然るに今此の修證義の趣意も亦た受戒の一法を以て未來成佛すなはち本證を顯はすまでのことであると云ふことは、前に擧げた「受戒するが如きは三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり」と高祖大師の證言せられたゞけでも能くわからねばならぬ。いかに宗乘が高尙なればとて幽玄なればとて「三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證する」と云ふより外に、他の所證のあべきに非ざることは、誰も疑ひの無いことであらう。

然らば何故に出家の僧侶たるものは、參禪辨道とか只管打坐とかいふやうなことを主とするのであるかと云ふに、それが卽ち其人の機根が種々違ふからである。已に是

れ出家して僧となつたからには、僧の僧たる所以の行業がある。其の行業が此の修證義の謂ゆる發願利生と行持報恩の上に顯はれてくるのであるから、只管打坐も二時の赴粥飯も、乃至諷經も托鉢も、皆これ利生報恩の願行であるので決して其の功德を以て成佛得道を求むるので無いといふことは、普勸坐禪儀に坐禪の心得を示されて、「作佛を圖るなかれ」と仰せられ、「只是れ安樂の法門なり」とも示させられ、殊に正法眼藏には「證上の修」と明言せられてある通りのことで、卽ち利生報恩の妙修に外ならぬのである。然るに其の自分が在家の俗人であり、其の機根が佛法專門といふわけにはゆかず、其れ〳〵に家業職業ある者は、其の自分の機根相應に利生報恩の願行を勤めるだけのことである。

要するに第一章は、此の修證義に五章三十一節ある中で尤も大切なる主眼のところで、前の懺悔も約まる所は此の受戒入位の準備に過ぎぬ。又此の後の發願も行持も皆

此の受戒の結果に過ぎぬのである。續いて第十一節に、

第十一節

次には深く佛法僧の三寶を敬ひ奉るべし、生を易へ身を易へても三寶を供養し敬ひ奉らんことを願ふべし、西天東土佛祖正傳する所は恭敬佛法僧なり。

凡そ受戒の順序として、先づ第一に三歸戒を受け、其次に三聚淨戒を受け、其次に十重禁戒を受ける。之を三歸三聚十重の十六條戒と謂ふのである。他門の戒律を學ぶ者などから申したならば、これにも種々と異議があるであらうけれども、我が曹洞宗の相承に於ては十六條戒と申すのである。先づ其の第一に三歸戒、すなはち「深く佛

法僧の三寶を敬ひ奉るべし」。何故に三寶を恭敬供養せねばならぬぞと云ふことは第十三節でわかるに依て、此では兎に角唯三寶を恭敬供養せよと云ふ事だけをお勸めになる。佛といふは屢々申した通り佛陀といふのを常には略して佛とばかり云ふて居る、これを支那の言葉に飜譯すれば覺の字になり、更に其れを日本の言葉にすれば、とりと云ふことになる。然るに其のさとりと云ふことが、更にさとりを開いた人と云ふ意味にもなつて、吾々が常に佛樣といふて居る釋迦如來や阿彌陀如來のことになる。卽ち佛と云ふは悟を開いた方と云ふことで、悟を開くと云ふは迷ひの無くなつたことであるから、前に申した貪瞋痴の三毒、いはゆる煩惱妄想を除いたのを卽ち佛と云ふので、是から後に追々出てくる戒法の德が明らかに顯はれた姿である。それ故に吾々お互ひも懺悔受戒が眞實に出來れば、此身此のまゝ直に佛陀のお仲間入りが出來るのであると云ふことも解らなければならぬ。

さて又法と云ふのは其の佛陀がお說きなされ且つ行はせられる一切の法則のことで、佛敎總體の上で申せば八萬四千の法門などゝ申すので、釋迦如來御一代のお說法は、謂ゆる一切經と申して實に夥しいことであるけれども、今此の修證義の上で申せば、他の事では無い卽ち懺悔受戒發願行持の法則が、取りも直さず法寶である。何故かと云ふに、謂ゆる八萬四千の法門も五千四十八卷の經論も、皆此の懺悔受戒の中に籠つて居らぬものは無いからである。

次に僧と云ふは、天竺の言葉で僧伽と云ふのを支那に飜譯すれば和合衆となる。卽ち仲の善い人々と云ふほどのことで、佛陀の敎に隨ひ其の法を修行して、自分も悟り他をも悟らせるやうに、謂ゆる佛法を十方三世に傳へ弘める方々を僧と云ふのである。今此の修證義の上では、歷代の祖師方を始め、今日現在佛祖の戒脈を傳へて居て、一切衆生に戒法を授ける資格のある宗師方は申すに及ばず、同戒を受けてある出

家の比丘尼は、皆これ僧寶と心得て恭敬供養せんければならぬのである。

さて此の佛と法と僧との三つが世の中に有りと有らゆる物事の中に就て、尤も大切にして且つ得難きものであると云ふ所から、之を寶と名けて三つの寶すなはち三寶と稱したものである。尚ほ三寶に三種の功德ありと申して、一體三寶と現前三寶と住持三寶との差別がある。先づ第一に一體三寶と云ふは、早く云へば道理の上から申したもので、佛陀すなはち悟りの道理は釋迦如來が成道なさらなくても、彌陀如來が正覺を取らないでも、自然法爾と申して本々から天地萬物の上に皆悟りの姿が確に備はつてある、それを一體三寶の中の佛といふ。又法と云ふことも其通りのことで、佛が說いても說かないでも、善因があれば善果があり惡因があれば惡果があると云ふやうな法則は、天然自然に行はれてゐる。又僧は和合の義と云ふのであるが、天地萬物本來皆和合の姿ならざるは無い。天と地が戰ふことも無ければ花と月が訴訟沙汰に及んだ例も無い、これが卽ち一體三寶である。次に現前三寶と云ふは、釋迦如來御在世の時のことで、卽ち現在釋迦如來が佛法で其のお說きなされたお經が其のまゝに法寶、さて又其の法をお聞き申した阿難だの目連だの舍利弗だのといふお弟子方、これは現に其の時に居られた方々であつたから、之を現前三寶と云ふのである。然るに釋迦如來のお肉身は八十のお年の二月十五日に遷化なされ、其のお說きなされた法を拜聽したお弟子方も追々と亡なられたのであるから、現前三寶には限りがあつたのである。そこで已むを得ず住持三寶が起るので、住持と云ふは住り持つと訓む。既に遷化なされた佛陀をば木像や繪像にして之を住持したてまつり、一旦耳の底だけに留めて置いたお經を、釋迦如來おかくれの後百年も經つてから始めて之を紙に書きつけ、更にそれを飜譯などいたして今日まで住持したのが卽ち法寶である。そこで其の木像や繪像を本尊と崇め、紙へ書きつけたお經を弘める末世今日までの僧侶を僧寶とするの

が、卽ち住持の三寶と申すのである。斯樣な次第であるに依て、現前三寶を今の世に目のあたり拜むと云ふことは出來ぬけれども、一體三寶と住持三寶とは今日でも確に揃ふて居る。尤も其中で住持三寶の木像や繪像を取り毀ち、紙に書いたお經を燒き棄てゝしまひ、世の中の僧侶を悉く殺してしまふたとすれば。住持三寶は其時に無くなるでもあらうけれども、謂ゆる一體三寶の佛法僧は、火で燒くことも出來なければ、水で流すことも出來ぬ。これが眞實の三寶で、吾々大乘佛敎を信奉するものゝ誠心を專らにして最も恭敬供養すべき所は卽ち其處に在る。それ故にかゝる三寶を恭敬供養することは、此世限りのことでは無い、「生を易へ身を易へても供養し敬ひ奉らんことを願ふべし」とある。生れかはり死にかはり、生々世々に親近奉事しなければならぬのである。又西天と云ふは天竺のこと、東土といふは支那日本のことで其の西天に於ては迦葉尊者を初祖として般若多羅尊者に至るまで二十七代、また支那

に傳はつてからは達摩大師を初祖として如淨禪師に至るまで二十四代を經て承陽大師に正傳し、それから孤雲禪師、徹通禪師とお傳へになつて、總持寺の御開山すなはち太祖常濟大師へ正傳せられ、其の御法孫が今日一萬四千ケ寺と弘まつたことであるが、其の正傳を約めて申せば恭敬佛法僧の外は無い。實に佛の說かれた法を僧が弘めるといふより外に何も別段のことのあるべきはずは無いのである。佛といふの一字の中には、十方三世の一切諸佛が皆こもつて居り、法といふ一字の中には八萬四千の法門もれること無く、さて又僧といふ一字の中には三國傳統歷代祖師乃至當今の敎師たちまでも皆ふくまれてあるので、誠に廣大無邊なことである。

第十二節

若し薄福少德の衆生は、三寶の名字猶ほ聞き奉らざ

るなり、何に況や歸依し奉ることを得んや。

これからは第十二節で、三寶に歸依することの容易ならぬわけと、他の外道などに歸依すべからざる旨とを示させられる。薄福少德とあるが、此の福と德との差別を先づ知らなければならぬ。これは福德とも福慧とも云ふので、德とか慧とか云ふ方は其人の心の上に備はる果報であるが、福といふのは其の人の身の上に係る果報である。委しく申せば正報と依報との事も論ぜねばならぬけれども、むづかしくなるから其れはお預りとして、德は心の上のこと福は身の上のことゝ先づ大別して置けばよろしい。

さて其の福にもせよ德にもせよ、皆過去世より積りと積る善惡業因のあらはれた果報の外は無いに依て、これに四句分別をしてみるがよろしい。四句分別と云ふは、何事でも物事が二つ並んだ時に、それを互に組合せて四通りに判斷して見ることである。

る。即ち過去の因緣にもせよ現在にあらはれた果報にもせよ、福も德も二つながら備はつて居るのが一つ、又福は有つても德の無いのが一つ、更に福も德も皆無なので四つになる。先づ第一に福も德も皆備はつて居るといふのは、我が國の古人で申さば聖德太子のやうな御方、これは實に福德圓滿な御方であらせられた。其の御身分を申せば用明天皇の皇子にお生れなされ、推古天皇の皇太子にお立ちなされて、富貴榮華何一つ御不足のあらせられぬ此上もない御福分と申さなければならぬ。而かも其のお德と申せば、深く漢學にお達しなされて日本の都ての文明の本をお開きなされ、殊に佛敎の上に於かせられては、法華經と維摩經と勝鬘經とに御注をお書きなされて、日本佛敎諸宗各派の惣御開山とも申し上ぐべき聖人であらせられた。今日吾々在家の者で、佛敎を信奉する標準とも目的ともすべき御方は、此の聖德太子より外にはあるまいと思ふ。即ち其の聖德太子といふ御諡號の

四字に、福と徳との圓滿を明かにあらはしてある。聖徳と云ふは、聖人の徳を備へられたこと、又太子と云へばやがて一天萬乗の君ともならせらるべき御方と云ふことが分る。

次に福はあつても徳の無いと云ふのは、これは幾らも類例がある。現に今日となれば昔の大名などのことを輕蔑して、少し智慧の足りない頓間なことでもすると、直に彼奴は華族面をしてゐるなどと云ふて嘲るやうなもので、いかにも氣の毒な次第である。さりながら過去の業因で福の種だけは十分に蒔いてあるものと見えて、身分に於ては何不足の無い立派な殿様で、男振りなども上品に生れついて見えるのであるけれども、如何にせん徳の方の種はとんと蒔いておかなかつたのであるから、氣の毒なから折角の殿様が天保錢で拔けてゐる、餘程足らないなどと云はれるのが世の中には澤山ある。

さて又其次に、徳はあつても福の無いと云ふ人達、これも隨分多くあるもので、昔から大徳なお方の一生貧窮に暮されたのが幾らもある中に、尤も名高いのでは孔子の弟子の顔回と云ふ人などは「回也三月仁に違はず、賢なる哉回也」と、孔子も常々殊の外に感心して居られたと云ふほどの人で、徳の勝れたことは孔子の弟子の中で第一番であるけれども、「一簞の食一瓢の飲陋巷に在り」と云ふて、其日其日の凌ぎにも困られた。其上不幸短命で、三十の年に亡なられたとあるから、福分の上からみては、誠に氣の毒の次第であつたが、其徳は今日に至るまで孔子に亜いでの聖人と言はれてある。我が佛教中の名僧知識にも、然ういふ例は幾らもある、尤も我が佛教徒の中には、十分にある福を自分は空しく費さずして、子孫のために遺すと云ふ所から、わざと貧苦の中に一生を送られたお方も澤山あるほどである。

それから其の次が一番に淺ましいので、福も徳も絶えて無い、早く申せば馬鹿で惡

いことばかりするから、貧乏の上に罪人などになるのが多い。斯様に四通りの差別のある中で、今この本文にある所の薄福少徳といふのは、薄はうすい少はすくないと云ふ字であるから、萬更皆無しと云ふわけでは無いけれども、殆ど無福無徳に近いのであるから、其れでは到底「三寶の名字だけも猶ほ聞き奉ることが出來ぬ」。名字と云ふは名前と云ふことで、佛とか法とか云ふ名ばかりも聞くことが出來ぬ、「何に況んや歸依し奉ることを得んや」名さへ聞くことが出來ぬものが、どうして親しく其のお弟子になることが出來やうぞ。其事は前の第二節に「佛法遇ふこと稀なり」とある所で、委しくお話してあつたと思ふ。

徒らに所逼を怖れて山神鬼神等に歸依し、或は外道の制多に歸依すること勿れ、彼は其歸依に因りて衆

苦を解脱すること無し

此の一段は、儀軌の方には「餘の邪魔外道等に歸依せざれ」とあるのを擴めてのお示しである。これは謂ゆる破邪とか駁邪とか云ふやうなことの上に就ても、尤も心得ておかねばならぬことであるが、兎角人間と云ふものは迷ひの起り易いもので、平生太平無事で何とも無い時には平氣で居るけれども、少し自分の力に叶はぬ事があると直に泣き出すやうになる。それは平生に於て安心決定する所が無いから何事にも卑怯未練になるので、中にも能く死ぬと云ふ事を甚く恐ろしがるに依て、僅かな病氣でも醫者が少し手重にでも云へば最う迷ひ出して加持だの祈禱だとの騒ぎ廻り、天理教の御水だの蓮門教の御符だのと狼狽へる。其れが卽ち「所逼を恐れ」ると云ふものである。所逼と云ふはせまられると訓むので、難澁なことに出逢ふと云ふほどのことで

ある。何事にもせよ、抜き差しのならないやうな場合に迫られると、それが恐ろしいと云ふ心から「山神鬼神等外道の制多」見かけ次第に拜み散す者が多い。山神鬼神等とある等の字の中には、天竺の人々の難有がる梵天も帝釋も夜叉も羅刹も、乃至西洋のゴッドも支那の上帝も、其他凡ての宗教で拜んでゐる、種々な神々が皆こもつてゐる。山神と云ふのは、天竺でも支那でも日本でも、高い山があると直に其山を神として祭る癖がある。天竺の目眞隣陀山、摩訶目眞隣陀山などゝ云ふ類、支那で五嶽を祭るのも日本で富士山や御嶽山を神としてあるのも皆大同小異で、今日科學の發達した世の中には、只一場の笑草に過ぎぬけれども、昔はなか〳〵本氣になつて拜む者があつたに依て斯樣なお叱りがある。鬼神と云ふは、支那では人が死んだのを鬼といふ。日本で鬼といふのとは少し違ふが、兎に角かの關羽などの如き軍人の死んだのを神として祭つて、それに禍福の差排を依頼する。日本で昔から國王大臣其他國家に功勞があ

あつたり民に德を施されたりした方々を神として祭るのは、彼の九段の靖國神社でもわかつたもので、これは決して之に祈りをかけて禍を除いたり福を授けたりして貰はふと云ふわけでは無い、只其の人々の功勞を尊んで靈を祭ると云ふまでのことであるから、まさかに招魂社へ願をかけて眼病を治してもらふとか、兵隊の死んだのを祭つてある處へ往つて金持にして頂きたいとか祈るやうな馬鹿な考へをする者は無からう。然るに早や天神樣だとか權現樣だとか云ふことになると、これに日參をして福を祈るといふ阿呆がある。そこで神主などが其の馬鹿を好いお客にして、御水や御符を賣ると云ふことになつた。これは實に我が日本の神祇の神聖を穢す大罪人と申さなければならぬ。外道の制多と云ふは、都て佛法で無い他の宗教や哲學などのことを皆外道と云ふので、制多は天竺の言葉で、之を漢譯すれば塔廟と云ふことになる。塔と云ふのも本は梵語で塔婆と熟字するのを、譯すと高顯となるのであるけれども、常には

略して塔とばかり申せば直に漢語のやうに聞えて、其品が確に判る。謂ゆる五重の塔とか三重の塔とか云ふのは申すに及ばず、堂塔などゝ續く時には自然と寺院のことにもなり、夫の鬼子母神堂だとか天狗の堂だとか云ふことにも聞える。廟と云ふは、全く人の死んだのを祭る處で、卽ち日本の神社なども其の類である

さて斯樣な次第で佛法以外の種々な宗教などにも種々な禮拜堂だとか教會堂だとか又は神社とか靈場とか云ふやうな處が澤山あるけれども、そんなものには決して歸依すべきでは無い。「彼は其の歸依に因りて衆苦を解脫すること無し」、こゝでも少し注意して置きたいのは、此の歸依と云ふことゝ敬禮と云ふことゝの差別である。兎角世の中の人情と云ふものは片寄りたがるもので、都ての外道の神社靈廟などに歸依するなと云へば、直に其れを聞き誤つてそれでは氏神にも鎭守にも敬禮せんでもよいのかと云ふやうに思ふ者が無いとも言はれぬ。それは飛んでも無い間違ひと云はなければ

ならぬ。歸依と云ふは歸命依賴の義で、身も心も其の信ずる所の神なり佛なりに打ちまかせることである。然るに敬禮と云ふは、お互ひ人間同志でも、たとひ自分より目下の者に對しても必ず其れ〳〵の禮と云ふことは無ければならぬはずのもので、已に人間同志に敬禮を失ふてはならぬと云ふことが分つたならば、其の人間の尊敬し禮拜してゐる神社や靈廟などに敬禮を失してはすむわけのものでは無い。殊に我國の神社の如きは皇室に屬する神社はもとよりのこと、其外でも大抵は皆國家社會に功勞があるとか、民に德を施したとか云ふ方々を祭つたので、祖先以來洪恩を受けてゐる神社が多い。尤も中には淫祠といふべき筋のものも無いでは無いが、それにした所で同じ國中の多少の人が尊崇してゐるといふ上からは、其の人達に對して無禮を働いてはならぬ。況んや氏神とか鎭守とか云ふ筋になつては、隨分誠實にお祭りをするがよろしい。然し其のお祭は決して煩惱生死の苦難を解脫して、菩提涅槃の樂果を得るの因緣

にはならぬのであるから、「彼は其の歸依に因りて衆苦を解脱すること無し」と仰せられたのである。

早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべし。

これまでが第十二節のお言葉で、三寶に歸依すべき所以を結ばせられた。前の一句に「早く佛法僧の三寶に歸依し奉りて」と云ふことは、今更講釋をするにも及ぶまい。衆苦と云ふは謂ゆる四苦八苦から乃至八萬四千の煩惱であるが、約めて申せば生死の二字に過ぎぬ。さて其の生死の苦海を渡り過ぎて、解脱すなはち百事自由の境界になるばかりでは無い、「菩提を成就すべし」とある。此事は後の第十四節でよくわかるから、それまでお預りとしておいて、次は第十三節

第十三節

其歸依三寶とは正に淨信を專らにして、或は如來現在世にもあれ、或は如來滅後にもあれ、合掌し低頭して口に唱へて云く、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、

此の一段は、三寶に歸依する歸依の仕方をお教へ下さる〻。此事は儀軌の上に委しい規則があつて、殊にこれが三歸戒と云ふ戒法となつて授受の儀式も立つて居るのであるから、要するに儀式のことは戒師教授師の教に隨ひさへすれば好いのであるが、其の三歸戒を授かるに就て尤も大切なることは、三業相應といふ一事である。三業のことは懺悔の所で委しくお話しておいたが、身と口と意との三つが相應するのが肝要である。そこで「正に淨信を專らにして」とあるのが意業、すなはち心を正しく淨

からに餘念を交へず信心を凝して、「合掌し低頭して」とある。これが身業で、合掌は手を合せ、低頭は頭を低くすると云ふことで、頭を下げることである。斯樣に身も心も能く整ふた上で、初めて「口に唱へて云く」、これが口業である。其の唱へる言葉は、「南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧」、これは略して三歸だけを擧げられてあるけれども、此外に三竟と云ふことがあつて、歸依佛竟、歸依法竟、歸依僧竟と云ふことを授けられる。これは三歸三竟と申して何の宗旨でも同じやうに授けられるものである。只其の三歸の言葉を、他宗では歸依佛歸依法歸依僧とばかり申して、南無と云ふことを唱へぬのが多い。尤も南無と云ふは天竺の言葉で、之を飜譯すれば歸命の二字になる。歸命といふのは命に歸すと讀むので、命は命令とつゞき、仰せ付けられと云ふほどのこと、歸は卽ち歸依であるから、仰せに打ちまかせ依り添ふて二心の無い、丁度娘が夫を持つて身も心も皆其の夫に打ちまかせる意味が、卽ち此の歸依の

義であるから、此の歸の字をとつぐと訓ませる時には、お嫁にゆくことになる。してみれば南無と云ふのも歸依と云ふのも所詮は梵語と漢語との違ひこそあれ、畢竟同じことになるに依て、南無佛とばかり申しても歸依法とばかり唱へても宜しいのであるが、曹洞宗の外にも天台宗眞言宗などは、矢張南無歸依と重ねて言ふ樣子である。

さて又曹洞宗では、此の三歸を更に一つ重ねて授ける、すなはち此の南無歸依佛南無歸依法の外に、歸依佛無上尊、歸依法離塵尊、歸依僧和合尊と云ふことを授けられる。これも甚だ御丁寧なことで、他宗では何れか一方だけで直に三竟を授けるのである。三竟の竟の字は、おはると云ふ字であるから、これで愈々三寶に歸依して了ふたから、もう決して外道などには氣迷ひいたしませんと云ふ誓ひの言葉である。然らばどういふ心得で斯樣に三寶に歸依するのであるかと云ふに、

佛は是れ大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故

に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す、

佛に歸依すると云ふことは、何宗でも同じことであるけれども　其の歸依する心得方に至りては種々違ひのあることで、早く申せば他力淨土門すなはち淨土宗や眞宗などで阿彌陀如來に歸依するのは　全く阿彌陀如來の力を賴んで、自分の信解行證は少しも用ひず、他力ばかりで往生させて頂くと云ふ歸依の仕方であるけれども、今此の曹洞宗は全く自力、すなはち自分が本來具足してある常住佛性の戒體を發得するのであるから、淨土門のやうに佛の力を賴んで救ひを受けると云ふわけでは無い。さりながら其の本來に具足してある戒體を發得するに就ては、戒師卽ち師匠の手引を受けねばならぬ。其の師匠と云ふ中にも教授師と云ふもあれば引請師と云ふもあり、又平常の受業師と云ふのもあつて一樣には申されぬが、其等の都ての師匠方を皆おしくるめた第一の師匠は卽ち佛であるに依て、「佛は大師なるが故に歸依す」と仰せられてあ

る。此の御一言で、曹洞宗の信者が都ての佛に對する考へを確に定めて置かなければならぬ。さもないと大抵の人は矢張り曹洞宗のお寺に安置してある本尊も、成田の不動明王も、厄除の弘法大師など丶云ふ類も同じことのやうに思ふて、拜みさへすれば直に家内安全息災延命と云ふやうなことを祈り立てることのやうに思ふて居るのが多い。承陽大師の大清規の中にも、常濟大師の清規の中にも、其のやうな祈りなどをすることは御一言も教へられては無い、唯々無上の大恩を受け奉つた御師匠樣として報謝の懇念を運ぶまでのことであると云ふことを忘れてはならぬ。家内安全も息災延命も、乃至其他の利益功德皆悉く懺悔受戒發願行持の中に籠つてゐないものは無いと深く信じて餘念を交へぬやうにせんければならぬ。

さて又「法は良藥なるが故に歸依す」、これは譬喩を以てお示し下されたので、吾々お互ひが無始劫來の長い間、貪瞋痴の三毒の爲めに身口意の三業が催ほされて、諸の

惡いことばかり積み重ねたのを、九死一生の大病人に譬へられ、其の大病を癒すには八萬四千の法門を種々のお藥もあるけれども、三世の諸佛、歴代の祖師、一子相傳の名方と云ふは、唯この常住佛性の慈悲心孝順心を調合した三聚十重の佛戒に勝る藥は外には無い。尤も三歸戒の上に於て歸依法といふ時には、只戒法に限つたと云ふわけでは無いけれども、今この曹洞宗の信者として最尊無上の法寶と仰ぐのは、たゞ此の佛戒の外は無いと信ずる。而かも其の信念中には其他の一切の法門は皆悉くこもつてゐるのである。例へば歸依佛と云ふ中には、三世の諸佛が皆こもつて居らせられても、別して我々娑婆の衆生の大恩敎主と仰ぎたてまつるは釋迦牟尼如來の御事であるのと同じわけである。斯樣なことは、決して漠然とした考へで何佛でも何法でも佛法に異りは無からうなどと見識らしいこと言ふべきものでは無い。已に一たび曹洞宗と限られたる上からは、必らず曹洞宗の正傳に隨つて深く信心を凝らさなければな

らぬのである。

又、「僧は勝友なるが故に歸依す」、僧は和合の義であると申すことは前にも申して置いたが、和合と云へば俗に睦ましいと云ふことであるから、一人の上で申すことでは無い、必ず二人以上の友達がある上で始めて睦ましいとか仲が惡いとか云ふことが起る。さて其の友達も種々あらうが、同じ師匠のお弟子となつて、同じ道の敎を受け、同じ利益を蒙ると云ふほどの勝れた友達は外にはあるまい。そこで吾々衆生の多い中にも、我が釋迦如來の同じお弟子で而かも其法も多い中から同じ佛戒を受けたてまつり、同じく諸佛の位に入り、同じく直に諸佛の子となるほどの頼もしい友達は無い。卽ち釋迦如來御在世の時の羅漢方から、今日現在の僧侶宗師に至るまで、たとひ其の智慧や學問には何程の違ひがあらうとも、此の受けたてまつる佛戒の上に於ては比丘も比丘尼も在家の男女も、四衆一同に登壇して同じ戒脈を相承する、之に勝つた友

達は外にあるべきでは無い。斯様なわけであるによつて、

佛弟子となること必ず三歸に依る、何れの戒を受くるも必ず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり、然あれば卽ち三歸に因りて得戒あるなり。

三歸戒は、實に諸宗各派通有の戒法で、彼の眞宗などは公然無戒と名乘りをあげて、彌陀一佛の本願の外は如何なることにも側目も觸れぬと極めた宗旨であるけれども、僧侶の得度式には必ず三歸戒を授けられるし、又日蓮宗も法華經の外は都ての事を皆取らぬ風習であるけれども、やはり歸依佛歸依法の唱禮は行はれる。其他の諸宗は勿論のこと、大乘小乘顯敎密敎の差別なく、皆三歸戒を以て入門の儀式とせられぬ宗旨は無い。そこの道理を「佛弟子となること必ず三歸に依る」仰とせられた。

さて又「何れの戒を受くるも必ず三歸を受けて其後諸戒を受くるなり」とある。此中で諸戒と云ふことは、先づ在家の戒と出家の戒との區別があり、更に在家戒の中で五戒八戒等の違ひがあり、出家戒の中で沙彌戒と比丘戒と比丘尼戒との違ひもあり、其外に菩薩戒は出家在家の差別なしに誰でも受けることが出來る。先づ大略斯様なわけで、種々な戒法があつて、それを受ける儀式も亦た各々差別がある。然るに其の種々な戒法に、皆それ〳〵の差別があるにも拘はらず、何の戒法を受けるにも先づ第一に此の三歸戒を受けてからで無ければ、決して外の戒法は授けぬと云ふのが、都ての授戒の規則となつて居る。此事に就ては、薩婆多論と云ふ本に問答を設けて議論がしてある。問ふて曰く「若し三歸を受けざる者も五戒を受ることを得んや否や」、答へて曰く「得ず、先づ三歸を受けて方に五戒を得べし」と斯う云ふてある。五戒と云ふは在家の人の受ける一番最初の戒法であるけれども、先づ三歸を受けてからで無くては

之を受けることが出來ぬと云ふのである。況んやそれより進んでそれ〴〵の戒法を受けるには、是非とも先づ三歸戒を受けなければならぬ。然うしてみると、三歸戒を受けた力を以て其の餘の戒法をも受けると云ふ道理となるに依て、「然あれば則ち三歸に依りて得戒あるなり」と仰せられた。阿含經には「歸戒を受くる前に於て、先づ須らく懺悔すべし、然して後に三歸を受く、正に是れ戒體」と說かせられてある。いづれにしても三歸の功德の深重なることは大略斯くの如くである、仍て更に此の歸依と云ふ事はどうして成就するのであるかと云ふことを、次の第十四節に示させられる。

第十四節

此歸依佛法僧の功德必ず感應道交するとき成就するなり、設ひ天上人間地獄鬼畜なりと雖も感應道交すれば必ず歸依し奉るなり。

此の一段は歸依する我々と歸依される三寶との關係を示させられたので、其の關係する樣子を感應道交と仰せられる。感應と云ふは、物と物とが親しく抱合ふて一つとも二つとも言へないやうになることで、平生吾々が火に觸れば熱いと知り水に觸れば冷たいと分るのを感ずると云ひ、若し又これと反對に熱いとも冷たいとも分らぬ時には、感じが無いと云ふのでも感の字の意味は大凡わからなければならぬ。應の字は、應接だの應對だのと續く字で、これは受け答へをすると云ふ意味、すなはち人に呼ばれて返事をするのを應ずると云ふ。さて又道交の道の字は都ての物事に皆それ〴〵の道がある。卽ち熱いと云ふのが火の道で冷たいと云ふのが氷の道であると申しても宜しい。佛菩薩には佛菩薩の道があつて、一切衆生を濟度しやうと思し召す。吾々衆生

は吾々衆生で、其の佛菩薩の加護を受くべき道に依て其の感應を仰げば卽ち交と申して吾々と佛菩薩とが一致の有樣になる。其の樣子を道交と云ふたので、交はまじはると云ふ字、物と物とが互ひに双方から抱き合ふ有樣が字の形にも顯はれて居る。そこで感應と云ふも道交と云ふもつまりは同じことで、三寶と吾々とが一味平等になつて、一つとも二つとも云はれぬやうになつた其の時に歸依と云ふことが成就すると仰せられる。

譬へば秋の空に澄み渡りたる月が照り輝いてゐても、うつかりしてゐれば月夜とも暗夜とも知らずにゐる。然るに若し今宵は十五夜であつたと氣がついて、窓の戸を開けて見る、皎々たる明月がちらりと此方の眼に映る。あゝ好い月だと思ふた時には、此方の眼と空の月とが一つになつて、何とも彼とも云ふに云はれぬ味ひが起るから、

月やわれ我や月かのわかぬまで

心も空にすめる秋の夜

と思はず知らず朗吟する時節が來る。それが卽ち月と我との感應道交である。又上手な面白い音樂などを聽く時も亦た其の通りのことで、音樂と自分とが別物になつてゐる中は未だ本統に感じたのでは無いに依て、他に何ぞ別な音でもすれば直に其方へ氣をとられることもあるけれども、眞實心底から感に入つたとなつては、たとへ雷電が落ちたからといふても餘處耳の聞ゆるものでは無い。今此の三歸も其の通りのことで、元來吾々お互ひに皆自分々々に一體三寶の性德を具へて居り、佛の慈悲智慧も解脫の功德も和合の妙用も、悉く生れながらに持つてゐるのを、何時の間にやら忘れて了ふて、彼の月夜やら暗夜やらうつかりして居るのと同樣な姿であつたのを、今佛祖のお聲がゝりに氣がついて、南無阿彌陀佛と唱へる途端に一體三寶と身口意の三業とが感應道交して、自分と三寶とが一つとも二つとも言はれぬ境界になる。そこの道

理を「感應道交すれば必ず歸依し奉るなり」と仰せられた。

さて其の感應道交さへ出來ることなら、人間や天上のみには限らぬ。地獄の衆生でも餓鬼でも畜生でも、皆この三歸が成就するぞと仰せられる。これを手近に申してみれば、苦しい時にも南無阿彌陀佛、悲しい時にも南無阿彌陀佛、さて又樂しい中からも嬉しい中からも、たゞ南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と寢ても起ても南無阿彌陀佛の三昧になるやうにせぬければならぬ。

已に歸依し奉るが如きは、生生世世在在處處に增長し必ず積功累德し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし、三歸の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりといふこと、世尊已に證明しまします、衆生當

に信受すべし。

此の一段は、歸依三寶の功德をお說き示し下されたので、凡そ天地間に有りと有らゆる物事は、如何にも奇妙不可思議なもので、皆その己れと同類の物事を殖してゆく性質を具へたものである。例へば火のやうなものでも、僅に線香の端にぽちりとついてゐる火は誠に微なものであるけれども、其の性質に己れの同類を殖す德を具へてゐるから、燃えつくべきところさへあれば直に其れへ燃え移つて、遂には家でも山でも皆燒き盡して了ふ。一粒の芥子が幾千萬粒の實を結ぶのも、吾々人間が子孫相續するのも皆同じ道理で、それが一生二生三世四世、乃至百千萬劫にも相續するのであるから、實に廣大無邊なことになる。さて此の道理が分つたならば、吾々衆生が朝な夕なに作りと作る善惡の作業も亦た其の通りのことで、「生々世々在々所々に增長する。」生

生世々と云ふたは三世に渡りて時間の有らん限りと云ふこと、在々所々と云ふは十方に渡りて空間の有らん限り、何時でも何處でも三歸の功德が增長と殖えて往つて功に功を積み德に德を累ねるから、「積功累德」と仰せられた。さて其の積功累德の結局はどうなることかと云ふに、「阿耨多羅三藐三菩提を成就」するのである。阿耨多羅三藐三菩提と云ふは天竺の言葉であるが、これを漢語に飜譯すれば無上正徧智と云ふことになり更にそれを日本の言葉で云ふて見れば此上も無く正しくて普ねく行きわたれる智慧と云ふことになるから、卽ち佛のお悟りと申すことである。斯樣に尊い佛の智慧と其の本はと云へば全く此の三歸戒から始まるのであつてみれば、「知るべし三歸の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりと云ふこと、」これは講釋をするにも及ぶまい。「世尊すでに證明しまします衆生當に信受すべし、」此中に世尊と云ふのは、佛の十號と申して如來と應供と正徧智と妙行足と善逝と世間解無上士と調御丈夫と天人師と佛と世尊

との十通りの稱號ある其中の一つで、卽ち世の中に一番尊いお方と云ふ意味を以て世尊と申したもの、其の世尊がすでに證明と申して、きつと其れに相違ないと云ふ證據人にお立ち下されてあるに依て、吾々衆生は一念も疑ひを起さずに信じて之を受持するが宜しいぞとのお示しである。

第十五節

次には應に三聚淨戒を受け奉るべし、第一攝律儀戒
第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり。

さて曹洞宗の授戒と申すは、十六條の佛戒と申して第一に三歸戒、その次に三聚淨戒それから十重禁戒と云ふ順序に授かるので、其中の三歸戒のことは已に前節までに濟んで了ふたから、今度は三聚淨戒のお示しである。一體に諸宗を通じて單に菩薩戒

とばかり申すのは、先づ此の三聚淨戒の事で、此の外の十善戒とか十重禁戒とか申すのは大抵此の攝律儀戒の說戒の上で其の戒相を說いて聞かせるまでのことであるが、比叡山の戒檀で出家の菩薩になる人は、やはり十重禁戒を受けて菩薩沙彌となり、更に四十八輕戒を受けて菩薩比丘すなはち大乘の大僧となるのであるが　曹洞宗では其れとも違つて出家在家の差別なしに皆十重禁戒まで授けられ、四十八輕戒のことは全然沙汰なしになつて居る。それは兎に角諸宗を通じて出家在家の差別なき菩薩戒すなはち三聚淨戒と申すは、前にも大略申した如く承陽大師が衆寮箴規の中にも、「梵網經瓔珞經、三千威儀經等を見るべし」と仰せられてある、其の瓔珞經の中に說かせられてある戒法で、一切の佛法の功德法門皆此の三個條の中に籠つて居る。

先づ第一に攝律儀戒と申すは、これは都ての戒律規律儀式等を皆一つに籠めて一個條の戒法とせられたもので、攝の字は、おさめると訓ませる字であるから、物の散亂

底になつてゐるのを手に掻き集めるやうな意味になる。其の下に律儀とある律は、ただすと云ふ字で、都て其うしてはならぬとか斯う爲ぬものぞとか云ふやうな掟とか誡めとか云ふやうなことは皆この律の字の中に籠り、又儀の字は行儀とか威儀とか續く字で、身の行ひにも係る。そこでこれは唯佛法の戒律や儀式ばかりでは無い、世間の國憲國法凡ての法律規則までも皆此中に攝まるので、一切の惡い事は皆決して犯すまいぞと云ふのが卽ち此戒の戒相である。

承陽大師が「諸惡莫作と願ひ諸惡莫作と行ひもてゆく、諸惡作られずなりゆく所に修行力たちまちに現成す」と仰せられたのも、全く此のところである。然るに世間の教や法律の上に在つては、惡いことさへしなければ、先づそれで國家の罪人となるわけも無く社會の義務が缺けると云ふ次第でもないと心得る者があるかも知らぬが、我が此の佛教の上に於てはたゞ惡い事をしないからと云ふだけでは許せない。更に進ん

で善い事を行はなければならぬと云ふことになる。例へば、世間では人の物を盗みさへしなければ宜いわけであるけれども、佛法に於ては盗みをしてならぬことは申すまでもなく、更に人に物を施さなければならぬと云ふことになる。それが則ち第二の攝善法戒であつて、善法と云ふは世間出世間の都ての善事を皆籠めたので、佛法の上では四諦六度十二因縁其他念佛でも題目でも坐禪でも觀法でも悉く皆此中に籠つて居り、世間の教の仁義忠孝公益世務、何に限らず人の爲め世の爲めになることならば、皆此の戒法の中に攝め盡してある。

さて個様な次第で一切の悪いことは決して爲さぬ、一切の善いことは必ず行ふといふ誓ひを立てるのも、畢竟は己れの利益のためと云ふわけでは決して許さぬのが、大乘佛教の尤も大切なる精神である。然らば何の爲めに悪を止めて善を行ふのであるかと云ふに、第三の攝衆生戒が其の目的である。此戒は繞益有情戒とも申すので、凡そ

世の中に生きとし生ける者を皆悉く救ふてつかさうと云ふ誓ひを立てるのである。これは今更事新しく申すまでもなく、一體に大乘佛教と申すものは、衆生濟度の外には何の目的も仕事もないもので、自分の飯を自分で食ひ、自分の衣服を自分に着るのも、乃至商賣するも農業するも皆悉く衆生濟度の外は無いのであるから、寢ても覺めても攝衆生戒の三昧とならんければならぬのである。さて此の三聚淨戒が、僅か三個條であるけれども都ての淨法すなはち煩惱妄想を淨め盡して淨らかなる法門を三個條聚め盡したのであるから、即ち三聚淨戒と名けられた。之を涅槃經や阿含經には七佛通誡と名けられ、すなはち諸惡莫作衆善奉行自淨其意の三句に說かれ、其次に是諸佛敎の一句が添へられてある。諸惡莫作と云ふは、諸々の惡しきことを作るなかれと訓む、これが第一の攝律儀戒で、それから衆善奉行、衆々の善いことは奉け行ふで、これが即ち第二の攝善法戒、さて又其次の自淨其意といふは、自ら其の意を淨くする

と訓むので、前にも申した通り凡そ大乘佛法を信仰する者は一切衆生皆悉く安心立命の出來るやうにと心懸けるのが最初よりの大願であるから、其の大願を果しきらぬ間は、自分の意が霽然と綺麗清淨となるわけにはゆかぬ。そこで自淨其意といふことが、卽ち第三の攝衆生戒に當る、此外に別に佛法といふものゝあるわけでは無いに依て、是諸佛敎と云ふてある。是れぞ諸〳〵の佛の敎なると云ふことである。昔から此の三聚淨戒を或は法報應の三身に配當したり、又は智斷恩の三德に配當したり、正了緣の三因に配當したり、其他種々高尙な議論も複雜な道理もあるけれども、今此の修證義の上では何もそのやうなむづかしい事を云ふには及ばぬ。第一の攝律儀戒は懺悔滅罪受戒入位の當體で、第二の攝善法戒は行持報恩、第三の攝衆生戒は發願利生である。之を尤も通俗に略して申せば、何でも惡いことは爲まいぞ、何でも善いことは勤めやうぞ、何事も皆世の中の爲めになるやうにと心懸けやうぞと云ふより外はない。出家

は出家相應に、在家は在家相應に、各々分に隨つて此戒の護持が肝要である。

次には應に十重禁戒を受け奉るべし、

これは前の三聚淨戒の第一たる攝律儀戒の精神は、卽ち他の事ではない只總ての惡いことは爲まいぞと云ふのであるけれども、唯ださう漠然としたことでは、どんな事が惡いのやら又どんなことが善いのやらわからぬことになる。そこで今度は其の惡いことに十通りの個條を立てゝ之を十重禁戒と名けられた。これは梵網菩薩戒經と云ふお經に說かせられてあるので、凡そ惡いことゝ云ふても澤山あるが、中に就て最も重い惡事を禁ぜられたのであるから重禁戒と名けられてある。さて其中の前の九個條の禁戒は之を身と口と意との三つ、卽ち三業に割り當てれば、身の戒めが三つ、口の戒めが四つ、意の戒めが三つになる。先づ最初に、

第一不殺生戒

これは凡そ生きとし生ける者の命を取ることはならぬぞと云ふ戒めである。故人の歌にも、

われもまた惜しとこそ思へ惜しと思ふ
心はおなじいのちならずや

と云ふのがあるが、實に命の惜しいと云ふ事は、佛がお戒めなさらぬでも祖師が禁ぜられぬでも、現に自分が何より一番大切として惜しいのが命であるといふことを知らぬ者はあるまい。すでに自分の命が惜しいと云ふ事が知れたら、同じやうに誰でも命は大切に思ふと云ふ事がわからなければならぬはずである。是等の戒相は其の道理も事實も昔から多くの先德が書き貽しておかれたものが澤山あるに依て、委しく知りた

いと思ふ人は其等の書物を見るがよろしい。即ち萬仞和尙の禪戒抄だの玄樓和尙の九品談だのと云ふのもよろしいが、尤も具はつたものは慈雲律師の十善法語である。此人は眞言律の高僧ではあるけれども、曹洞宗の大梅禪師に參じて宗眼も明らかな方であるし、別して此の十善法語は後桃園院天皇の御母恭禮門院御方のために十善戒を講釋せられた聞書で、誠に正しい且つ氣高いものであるに依て、心ある人は必ず一度は拜讀するがよろしい。

第二不偸盜戒。

これは自分のものと定まらぬもの、卽ち他人の所有物を自分の自由にすることはならぬと云ふ戒めである。偸の字も盜の字も皆ぬすむと訓む字であるが、盜むといふても人の家へ忍び込んで强盜するとか窃盜するとか云ふばかりが盜みではない。凡そ

義に非ざれば取らずと申して、自分の物とすべき道理のないものは紙一枚でも私しにせぬと云ふのが此戒の精神である、これも亦た十善法語に委しく說かれてある。

第三不邪婬戒、

これは其の配偶に非ざるを亂らざるを謂ふと古人が注しておかれた通り、卽ち夫婦でもない者が夫婦のやうな交はりをするのを名けて配偶を亂ると云ふのである。尤も夫婦で有る無しに限らず、凡そ男女の交はりに亂りがましいことのあるのは、皆此の戒の重禁である。

さなきだに重きが上の小夜衣
わがつまならでつまなかさねそ

と云ふ古歌もある。夫婦の間でさへも夫婦別ありと云ふてあるに、況んや夫婦でも

ないものは深く愼しまなければならぬ。

第四不妄語戒

これは虛言僞語を言ふまいぞとの戒めである。見たことを見ぬと云ふたり、聞いたことを聞かぬと云ふたり、知りもせぬことを知つたふりをしたり、都て口の先で人を欺き誑かすのが、皆此の戒の重禁である。妄はみだりと訓む字で、まことの反對である。都べて誠實の無い物言ひは皆これ妄語である。十善戒の方では之を更に四つに分けて、惡口と兩舌と綺語と妄語とになつてゐるが、委しいことは矢張り十善法語に就て承得するがよい。

第五不酤酒戒、

酤酒の酤の字はうると訓んで酒を賣ることを禁じられたのである。五戒の方ではこれが不飲酒となつてゐて、酒を飲まぬと云ふ戒めであるけれども、此の梵網經の方では不飲酒を輕く扱はれて、却て飲む方よりも賣る方を重くせられてある。これは何故かと云ふに、飲むと飲まぬは自分一人のことであるけれども、賣ると賣らぬとは多くの人に關係するからである。すでに人に飲ませることがならぬと云ふからには、自分で飲まぬは知れたことである。然るに我が日本の朝廷では、昔から甚だ酒を尊ぶ習慣があつて、表立つた儀式にまで勸杯と云ふことがあり、正月の御修法にも導師其の他の僧衆に神酒を賜はり、十二月の佛名懺悔にも夜半に拍梨と唱えて神酒を賜はることがある。殊に昔し曹洞宗の和尚達が參内した時にも、天盃を賜はるのが御儀式になつてゐたものであるから、我宗の酒は勅許恩賜の酒であると云ふやうなわけで、如何に堅固な和尚でも酒を飲むことは當然のやうに心得てゐたのが今までの慣習であるけ

れども、餘り褒められたわけの事でも無い。況んや近頃は基督教徒が頻りに禁酒を勸めてゐるし、同じ佛法の中でも無戒と定まつてゐる眞宗の青年佛教徒間には反省會といふものが組織され、更に最近一部の知識階級では三月の白酒さへも甘酒にしたがよいといふ宣傳さへ行はれてゐる際、我が曹洞宗でも禁酒の風習を起したいものであると思ふ。尤も酒を賣りはしないから不酤酒戒には背かないと云ふ人があるかは知らぬがこゝの酤るといふ字は人に勸めて飲ませる事を都て含んでゐると見なければならぬ

第六不說過戒

不說過といふは、あやまちを說かぬと云ふことで、人の惡いことを他人に向つて言ひ觸さないことである。一體人の惡口などを云つたからとても格別面白くもないのであるけれども、兎角自分に覺えのあることは直によく解るに依て、惡人は人の過失を

云ひたがる。殊に此戒は僧侶の過を說くのを重に戒められたやうに經文の上では聞えるけれども、つまり己れと同じ仲間の朋友の罪過を說くのが尤も惡いと云ふことに見なければならぬ。四十二章經には、人の惡口を云ふことを戒められて、譬へば自分の口に穢らしい物を嘲へて人に吐きかけるやうなものであると仰せられてある。向ふの人には當るか當らぬか判らぬけれども、自分の口は確に穢れて了ふてゐる、誠に適切なお譬である。

第七不自讚毀他戒、

これも口から出る罪で、自讚と云ふは自分を褒めること、毀他といふは他人を惡くいふこと、それが自讚毀他といふので、其上に不の字が附いてゐるのであるから、其ういふことを申すまいぞとのお戒めである。

第八不慳法財戒、

これは貪欲のお戒めである。此事は後の第二十二節のところで委しくお話をしなければならぬが、慳の字は、おしむと云ふ字で、法の字は自分の智慧の事、財は金錢その他都ての物の事である。一體に大乘佛敎の信者と申す者は、第一に施しをすると云ふことに心懸けなければならぬはずであり、其の施しに財の施しと法の施しとがある。法の施しと云ふは、佛法の上にもせよ、世間の事にもせよ、凡そ自分の覺えゐるだけのこと知つてゐる限りのことは、何でも惜まずに人に敎えて進ぜるのが卽ち法の施しである。又財と云ふのは、申すまでもなく都て物に不自由をしてゐる人には衣類なり金錢なり何でも惜まず施し惠む、それを財施といふ。個樣に施しをするのが、卽ち此の戒の戒相である。

第九不瞋恚戒、

これは己れの氣に入らぬことがあるからと云ふて、怒り腹立つことを戒められたのである。瞋り腹立つと云ふことが何故惡いのであらうかと云ふに、先づ人に腹を立たれた時のことを考へて見るがよろしい。如何なる美人でも腹を立てゝ額は青筋などを張らせ眞赤になつて怒つた時の顏色は見られたものではない。それだから維摩經には三十二相と云ふ美しい姿は、不瞋恚戒を持つた果報の現はれであると仰ぜられてある。これで前の九個條は濟んだが、更に次の一個條が尤も大切である。

第十不謗三寶戒なり、

これは前に受けた三歸戒そのまゝに此戒の當體で、すでに三寶に歸依したものが三寶を謗るはずは無いのであるけれども、尙ほ十重禁の隨一として尤も肝要な戒法である。何故かと云ふに、此の一戒を眞實本統に持つことが出來れば、其餘の九戒は皆おのづから此中に籠つてゐる。其の理由は前にも申した通り、三寶に三種の功德ありと申して、一體三寶と現前三寶と住持三寶との差別はあるが、一歸依の時もろ〳〵の功德圓成すと云ふて、一たび南無歸依佛南無歸依法南無歸依僧と眞實至誠に唱ふる心になつた時、謂ゆる感應道交して、此身このまゝ佛法僧の三寶と一致冥合するに依て、すでに三寶と一致冥合したものが、何で殺生が出來ませうぞ、何で盜みが出來ませうぞ、乃至邪婬妄語酤酒說過すべての惡いことは皆悉く出來なくなる。謂ゆる諸惡作られずなりゆく所に修行力たちまちに現成すと承陽大師の仰せられたのは、まさに此の道理である。

さてそも〳〵此の佛戒と申すものは、全受分持と申して、受ける時には十戒を全く皆受けて持つことは其の一部分でもよろしいと承はる。全く受けるといふは、十戒

を皆受けることで、分に持つといふは、自分の持てるだけを持つといふことである。又此の戒のことを別に解脱戒とも申して、一戒々々に別々に解脱の功德がある。それ故に此の十重禁の中で、一戒でも二戒でも本統に自分の持てるだけを堅固に持つといふことに心懸けるがよろしい。さて又小乘戒では、自の罪は身だけのことで、口や意には關係なく、口の罪は口だけ、意の罪は意だけと皆其の區域が限られてあるけれども、大乘戒はそれとは違ひ、心地の法門と申して一切の事を悉く心の上から論ずるのであるから、身の罪も口の罪も意の罪も皆互に係り合ふて其の持犯を判斷することになる。例へば小乘戒では殺生と云へば、打ち殺すとか斬り殺すとか毒殺するとか云ふだけが殺生戒を犯したと云ふことになるけれども、大乘戒ではさうはゆかぬ。意の中で殺したいと思ふたばかりでも、口で殺すぞと言ふたゞけても、皆殺生戒を犯したことになるのである。その代りには小乘戒では如何なる理由があつても殺したのは殺

したに相違ないときまるが、大乘戒では其の殺した理由に依ては罪にならないと云ふ判斷も出來る。偷盜でも邪婬でも妄語でも皆其の通りで、小乘では如何なる理由があらうとも、見たことを見ないと云ふのは妄語に違ひないが、大乘では隨分有ることを無いと云ふても、それを方便と名けられることがある。然しそのかはりには口で僞をつくばかりではなく身體の上でも、僧侶が俗人のやうな風態をしたり、商人が軍人と見えるやうな支度をしたりするやうなことも、皆妄語の中に攝せられる。此の道理をよく心得なくては、戒相の持犯を彼此と斷定することが出來ぬ。さりながら其邊のことも亦た夫の十善法語などを氣をつけて讀んでみるとよく解ると思ふが、今此の修證義の上では其等のことも何も彼も皆たゞ一つの信の字に籠つてあるので、謂ゆる「汝は是れ當成の佛なり、我は是れ己成の佛なり、常に是の如きの信を作さば戒品すでに具足す」とある、此の信の一字が何より肝要であつて、他のことは餘り彼此とむづか

しく云はぬがよろしい。

上來、三歸、三聚淨戒、十重禁戒、是れ諸佛の受持したまふ所なり。

これは第十五節の結文で、文相はよく分つてゐる。次に第十六節、

第十六節

受戒するが如きは、三世の諸佛の所證なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を證するなり、誰の智人か欣求せざらん、

前の三歸戒の所では「生々世々在々處々に增長し、必ず積功累德して阿耨多羅三藐

三菩提を成就するなり」と仰せられて、まだ未來のことにしてあつたのを、最早や此に至つては三聚淨戒も十重禁戒も皆受けて了ふた上のことであるから、たしかに阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の佛果を証すと仰せられた。阿耨多羅三藐三菩提は、無上正偏智と稱し、俗に申せば此上もなく正しく而して一切平等に偏くゆきわたる所の智慧といふ意味であると云ふことは、前の三歸戒の所で委しく述べておいたことゝ思ふ。金剛不壞と云ふことは、凡そ石だの金だのと云ふ堅い物の中で一番堅いものは金剛と云ふものであると申すことで、近來は西洋からダイアモンドと云ふものが舶來して、誠に此上もなく堅いばかりでなく、眞暗な處へ置いても光を放つと云ふことである。昔支那で夜光の珠と云ふたのも或は其の種類であつたかも知れぬ。兎に角それが謂ゆる佛經中に散見する金剛であるか無いか知らぬけれども、先づ世の中にある物の中で一番の堅いものと思ふたらよろしい。そこで一番に堅いものだからどのやうにし

ても夫を壞ることが出來ぬ。其の壞れぬと云ふことを不壞と云はれたので、これは全く譬喩である。無上正徧智と言はれる佛の悟りはどのやうなことをしても壞ることは出來ぬ、その道理を委しく說かれたものは大般若經の第五百七十七卷目に能斷金剛分と云ふのがある、それを別に飜譯したのを金剛經と名けられて諸宗では常に讀んでゐる、鼓山の元賢禪師の注を書いたのがあり川老と云ふ人が講釋したのもある。金剛の道理を委しく知りたい人はそれを見るがよろしい。

世尊明らかに一切衆生の爲に示しします、衆生佛戒を受くれば卽ち諸佛の位に入る、位大覺に同うし已る、眞に是れ諸佛の子なりと。

此のお言葉一つが、吾々衆生が念佛によらず陀羅尼をも賴まず、只受戒したばかり

で必ず卽身成佛が出來ると云ふ何より證據である。それ故世尊明らかに一切衆生のために示しますと仰せられた、一切衆生の爲にとある所に注意して拜見しなければならぬ。こゝで別段に菩薩の爲めとも羅漢のためとも仰せられては無い、一切衆生の誰彼の差別は無い、凡そ受戒することの出來るものなら、皆其の當機の人である。此の衆生佛戒を受くれば云々のお言葉は、梵網經の中にある盧遮那佛のお說で、凡そ生けとし生けるものは、誰彼に限らずたゞ此の受戒さへすれば卽ち諸佛の位に入る、卽ちと云ふは其儘直にといふほどのこと、諸佛の位に入ると云ふは、十方三世の諸佛と同じ仲間入りが出來ると云ふ意味合ひ、このお言葉が修證義の中でも肝要な受戒入位と云ふ文字の出所である。そこで其位といふのはどのやうな位であるかと云ふに、位大覺に同うし已るとある。大と云ふは限りの無いこと、謂ゆる盡十方法界に充滿して行き渡らぬ所の無い姿、又覺といふは、其の十方法界に充滿してある佛の悟り卽ち法

身如來のことで、吾々衆生が生れかはり死にかはり煩惱業苦の海の中に浮沈して來たのは、畢竟この大覺即ち本證に背いたからのことであつたが、今といふ今遭ひ難き因緣にめぐり遇ふて、佛祖正傳の受戒が出來た、其の當體が直に大覺の本證に立戻ることが出來たのである。さりながら大覺の本體は、吾々の身體のやうに形が定つて命に限りあるものではないに依て、且らく其の大覺に同うして已ると仰せられ、又眞に是れ諸佛の子なりと言はれてある。こゝで諸佛と云はれたのは、過去現在の八相成道の儀式の濟んだ諸佛方のことで、諸佛成道の儀式には八相と云ふことがあり、即ち釋迦如來は同じく其の八相の儀式を此の娑婆世界でお示しなされたのである。八相のことは今委しく申して居ることは出來ぬに依て、手近いところでは大無量壽經と申して淨土宗や眞宗で平生誦んでゐる二卷のお經がある、其の上卷の初めのところに此の八相の樣子が委しく說かれてある。然るに吾々衆生は今こゝで諸佛の位に入つたには相違

ないけれども、譬へて見やうならば天子の御子に生れたと云ふやうなわけで、生れたばかりでも其位は一天萬乘の君に相違ないが、まだ即位の儀式が濟まぬ間は皇太子と云ふ名が附いてゐる。吾々も亦其の通りで、すでに佛戒を受けたからには佛になつたのではあるけれども、やがて八相成道するまでは、まだ佛子といふ名が附いてゐる。然し其の八相成道を何時するのであるか、又は必ず八相成道せぬければならぬのかといふことに就ては、更に後に至つて能く解る時があるから、今は先づこれだけにいたしておく。

第十七節

諸佛の常に此中に住持たる、各各の方面に知覺を遺さず、群生の長へに此中に使用する、各各の知覺に方

面露れず。

これは三世の諸佛もろともに此の佛戒を持たせられる樣子を說いて、其通りに吾々衆生も同じく此の佛戒を我が物に働かせてゆく樣子を示させられたのである。此のお言葉が都合四句になつてゐて、諸佛と衆生と方面と知覺との四つの名目を双方から互に言ひかけて、此の四つのものが一つであると云ふことをいひ顯はされてある。先づ「諸佛の此中に住持たる」とある、此中と云ふは佛戒卽ち人と各自の本證とも大覺とも本具の戒體とも本來の面目とも名けられる本體の中にと云ふこと、住持と云ふは住は、とゞまると訓む字で常住と續き、何時でも變りなく其の本位に落着いてゐること、持はたもつと訓み、持つと云へば其の本來具はつてある作用を失はないことである。さて其の佛戒の中に住持して本證を働かせる景況はどんなであるかと云ふに「各々の

方面に知覺を遺さず」とある。方面と云ふは方々面々と云ふ事で、何處でも何にでも云ふほどのこと、すなはち一切萬物を總稱して各々の方面と言はれた。知覺と言ふはいはゆる知識感覺で、吾々の心の作用をいふ。遺さずといふは俗に落が無くと云ふほどのことで、都てに行き渡つてゐることである。そこで此の各々の方面に知覺を遺さずと云ふお言葉を俗に言ふて見れば、都ての物事に心が行き渡つてゐるといふ事になる。卽ち諸佛の悟りは宇宙萬象に普く蒙らしめてあるといふことで、其實は萬物と一人とが平等にして差別が無いといふ事である。諸佛の一心と萬物とが一つであると云ふことが解つたならば、天地萬物が皆諸佛の心であるから、日の照るのも月の輝くのも、花の咲くも紅葉の散るも、犬の糞も牛の小便も皆悉く佛心の顯はれた姿であると云ふ事が悟れなければならぬわけである。さて又次の句に「群生の長へに此中に使用する各々の知覺に方面露はれず」とあるのも、前と同じ論法で唯諸佛と衆生と

の觀察の向方が違うて、前は諸佛の方から言ひ、これは衆生の方から言ふたまでの事で、元來諸佛と衆生との差別を見ない場所、すなはち衆生其儘に諸佛の位に入つた上の話であるに依て受戒入位の衆生は長へに此中に使用する、即ち佛戒を朝な夕な爲ること作すことの道具として使ひ用ひて居る、其の景況は各々の知覺に方面露はれず、これも前と言葉が前後したゞけの相違で、知覺といふは衆生の作用のこと、其の衆生の心そのまゝが宇宙萬象に普く一致して山も川も雨も風も皆たゞ孝順心慈悲心の姿となつてくるから、各々の方面が露はれないとは、これは山であるこれは川である彼は他人である此れは親族であると云ふやうな別々な姿が見えぬと云ふことである。結局、萬物と己れと感應冥合して、萬物の外に己れなく己れの外に萬物が無い、謂ゆる心境不二生佛一如と云ふことになる。

此時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆佛事を作すを

以て、其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯はす、是を無爲の功德とす、是を無作の功德とす是れ發菩提心なり。

さて前に申した通り諸佛と衆生との差別もなく、物と心との區別もないとして見れば、十方法界、この十方といふ二字は、空間の無限なることを言ひ顯はした言葉で、東西南北で四方、また其の隅々すなはち東南の隅と南西の隅と西北の隅と北東の隅とを四維といふ、此の四方四維に上と下とを加へて十方になる。此の限りなき空間に限り知られぬ萬物がある、其の萬物を佛敎では諸法といふて、其の諸法の充滿てある世界といふ意味で十方法界といふのである。さて其の十方法界に有りと有らゆる「土地草木牆壁瓦礫」…これは申すまでもあるまい、乃至日月星辰風雨水火、凡そ天地間に有

らゆる物事が「皆佛事を作すを以て」佛事を作すと云へば、何やら作すものと作されるものと二つあるやうにも聞えるが、其の實は是等の都ての物柄事柄其のまゝに皆佛心であると云ふことは、前の文句で解つてゐる。即ち佛心いはゆる孝順心慈悲心そのまゝの十方法界から「起すところの風水の利益に預る輩」こゝで風水と言はれたのは、直に吹く風や流れる水のことを言ふのでは無い、早く申さば其中に生活して居るものはと云ふほどのことを、風水の利益に預る輩と仰せられた。それが「皆甚妙不可思議の佛化に冥資せられて親き悟を顯す」甚妙と云ふは當に甚深微妙と云ふのを略したので、即ち不可思議と云ふことを形容した言葉である。不可思議といふは、一體どのやうに考へても考へきれぬといふ事で、謂ゆる心も言葉も及ばぬと云ふ事、實に佛戒の法界を教化利益せらるゝ有様は、何と言ふて見やうも無ければ考へて見やうもない、其の廣大無邊なる佛戒の利益に冥資せられると云ふは、冥はくらいと云ふ字、

資はたすけると云ふ字、即ち其の利益が目にも見えねば耳にも聞えず、知らず〳〵の間に蒙るから冥いといふ字を使ふたもの、又資る云ふことは、申すまでもなかからう。さて親き悟を顯はすといふ、ちかきと云ふ場合に殊更親しいといふ親の字を當てられたのが面白い。實に悟りは餘處から來るのではない、自分と自分に生れてから死ぬるまでは愚かなこと、生れぬ先から死んだ後まで暫時も離れることのならぬ此身此心そのまゝが悟である。これほど親しいものは無いのであるけれども、何時の間にやら煩惱妄想のために眛まされて疎くなつてゐたのを、今といふ今受戒入位の因縁で其の本證の全體が顯はれたのであるから、親き悟を顯はすと仰せられた。

さて斯様な功德を名けて何の功德と曰ふのであらうぞといふに、「是を無爲の功德とす是を無作の功德とす」爲の字も作の字もなゝと云ふ字で、粗く申せば人手にかけて仕拵へをすること、細かに申せば心の内で斯うしやう彼しやうといふ料簡を加へた

ことは、皆作爲と云ふものである。然るに今此の甚妙不可思議の有様は、本より人手で出來ることでは無い、彼れの此れのと料簡の及ぶべきでは無い。世間の言葉で申せば天然自然の本性本德であるから、無爲無作と云ふてある。何事でも無爲無作とならなければ、本統のことにはならぬ。君に忠義を盡すのでも親に孝行をするのでも、あしなければ濟まぬとか、斯うもしたら感心なさるであらうとか云ふやうに、料簡を加へ仕拵へをした忠義孝行は、本統の忠義孝行とは申されない。眞實の忠臣孝子はそのやうなものではなく、天然自然に臣子の誠心が溢れ出て、君にも誠實になり親にも篤厚となる。それが即ち無爲無作の忠孝と申すので、都てのことを之に準じて知るべきである。

さて是れで先づ佛教の目的は全く達したと申すもので、これより奥には最早や何も無いかと云ふに、いよ〳〵の結果に「是れ發菩提心なり」とある。發菩提心と云ふ

は、委しく申せば發阿耨多羅三藐三菩提心と云ふので、之を略せばたゞ發心とばかりも云ふ。然るに大方の人は、發心とさへ申せば苅萱道心とか熊谷の蓮生坊とか云ふやうなのが、一時の感情を抑へきれずに家をも妻子をも振り捨てゝ墨染の袖に身をやつし茅鞋竹杖で山の中にでも隱れるのをばかり眞實の發心のやうに思ふて居る者が多いけれども、それは飛んでもない間違ひと申すものである。一體に阿耨多羅三藐三菩提心を發すと云ふことは、大乘心を發すとも申すので、一切衆生を悉く濟度し盡さうといふ心懸けになることである。然るに其の一切衆生を盡く濟度しやうと云ふ心懸けになるには、因果の道理が眞實に解つた上に、凡そ生とし生ける者は皆平等一味のものであると云ふことが悟れぬ間は、なか〳〵一切衆生を濟度しやうと云ふやうな大願心の發るものでは無い。然るに其の因果の道理を明らめる第一の手續きとしては、必ず世の中の無常を觀ずると云ふことが最初の手掛りであるに依て、承陽大師も龍

樹菩薩の言葉を引て「無常を觀ずるの心これ菩提心と名く」と仰せられたこともある。彼の苅萱道心流義の發心といふのは、其の第一最初の手掛りだけのことで、それから次第に段々と進んで遂に此の甚妙不可思議の佛化に冥資せられると云ふ所まで往き了せぬに依て、聲聞同樣に獨り山の中に念佛唱へて居るやうなことにもなる、それではまだ〳〵眞實の發心の成就した者とは申されない。眞實の發心と云ふは、卽ちこに仰せられてある如く、無爲無作の功德に到り得た所、これが卽ち發心の成就したので、言葉をかへて申せば一切衆生を一味平等に皆悉く濟度しやうと云ふ大願心の發つたのである。此事にに就ては最初にお話いたしておいた修證一如と云ひ、又は證上の修と云ふことなどを考へ合せて、よく〳〵參究すべきである。

第四章　發願利生

さて前章に於て既に受け得たる所の佛戒、すなはち三歸三聚十重禁の十六條戒は、

其の本體を申せば三聚淨戒の外はなく、其の戒相を開けば八萬四千の法門とも成るのであるが、其中に攝律儀の上に於て梵網經及び瓔珞經に說かせられてある十重禁戒の相用である。別して平素の布薩にも必ず讀誦してゐる梵網の戒相には、每戒多くは常住の慈悲心孝順心と仰せられて、凡そ戒法と云ふものは概ね常住の慈悲心孝順心が具體的に吾人の言行の上に顯はれたものである事を證明されてある。卽ち常住といふのであるから、十方三世に限りなく、諸佛にも一切衆生にも皆平等に具有して居る所の本性本具の慈悲心と孝順心とである。其の生佛平等本來具有の慈悲心が吾等の行爲の上に顯はれて出るのであるから、賴まれても强ゐられても決して他人の迷惑になるやうな惡い事は出來なくなる。生佛平等本來具有の孝順心が吾等の行爲の上に顯はれて來るのであるから、賴まれないでも望まれないでも他人の爲に都合の善い事は必ず出來るだけ仕向けて往かねばならぬことになる。是れは本來具有の本性本德であるけれ

ども、今正しく佛祖相承の儀式作法に催されて顯現發得することになつたのが、卽ち受戒入位の當體である。其れ故に其の常住の佛性が朝な夕なに働く姿は、發願利生が卽ち慈悲心、行持報恩が卽ち孝順心、此の二つの外に受戒の功德が世に顯はれて活動さやうは無い。言葉を換へて言はゞ、受戒入位の上は最早や佛である凡夫では無い、已に佛となつたからには朝な夕なに爲すこと、皆悉く佛の仕事にならねばならぬ。謂ゆる其の佛の仕事とは何であらうぞ、衆生濟度の外に佛の仕事は無い。其の衆生を濟度することを利生と云ひ、利生をするには菩提心を發すのが第一である。そこで其の菩提心を發すことを、發願といふのである。

第十八節

菩提心を發すといふは、已れ未だ度らざる前に一切

衆生を度さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも、樂にありといふとも、早く自未得度先度他の心を發すべし。

これが第十八節である、卽ち發願といふは如何なることであるかを示させられたのであるが、發願といふことは前にも申した通り菩提心を發すことで、菩提心と云ふは、一體菩提といふのも佛陀といふのも勃陀といふのも皆天竺の言葉では同じ言葉で、畢竟佛といふことである。其の佛と云ふことの下に心と云ふ字を加へたのであるから、菩提心といふは佛心と云ふことである。然らば其の佛心を發すと云ふは何んな心かと云ふに「已れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營む」のである。度

ると云ふのは、迷ひの此岸から悟りの彼岸へ度ると云ふ意味で、生死の世界を海に譬へた上から起つた言葉で、濟度といふのも救ひ渡すと云ふことで皆同じ言葉である。

さて其の生死の大海を、迷ひの此岸から悟りの彼岸へ渡ると云ふに就て、先づ自分が先に渡つて釋迦如來や彌陀如來のやうな三十二相備はつた神通自在の身になつて、それから後で一切衆生を濟度すると云ふのが順序のやうであるから、宗旨に依つては其の通りに敎へられて、此世では到底成佛は出來ぬに依て、早く此世を暇乞して未來の世に成佛し、其れから衆生を濟度するやうにと安心する向もあるさうだが、曹洞宗では其うで無い。己れが先づ佛にならうといふ料簡はさつぱりと棄てゝ、己れより前に先づ一切衆生を濟度しやうといふ大願を發すのである。此の大願は此の身このまゝ直に發すのであるから「設ひ在家にもあれ、設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ、或は人間にもあれ、苦にありといふとも、樂にありといふとも」と其の身柄も位置も

擇ぶことではない、片時も「早く自未得度先度他」、謂ゆる己れより先に他人を濟度すると云ふ心を發せよと仰せられるのである。

人をのみわたし〳〵ておのが身は
岸にのぼらぬ渡守かな

さりながら或る一類の佛敎者に言はせると、己れが未だ佛にならぬ前に衆生を濟度せよと云ふのは無理な注文である、己れが未だ水を泳ぐことを知らずにどうして他人の溺れるのを濟はれやうぞと云ふ向もあらうが、それは其の人達の宗旨の信仰が其れまでの事と申すもので、今此宗の正傳に於ては此身此のまゝ常住佛性の戒體を發得した者の外に、別に佛が有るとは言はぬのであるから、言葉の上でこそ「己れ未だ度らざる前に」と云ふてあるけれども、其實は疾うに諸佛の位に入り、位大覺に同うし己つた身であるに依て、此身このまゝ佛の仕事であるから、第十九節に、

第十九節

其形陋しといふとも、此心を發せば、已に一切衆生の導師なり、設ひ七歳の女流なりとも卽ち四衆の導師なり衆生の慈父なり、男女を論ずること勿れ、此れ佛道極妙の法則なり。

設ひ其の形は三十二相を具足せぬでも、白毫から光明は放たなくても、又年は往かぬでも、婦人女子でも、男女の差別も無ければ利口愚鈍の論も容らぬ、唯自未得度先度他の心だに發して、多くの人のためになるやう、世の中の夥多の人に眞理の光を見せたいといふ念願にさへなれば、其身其のまゝ、一切衆生の大慈父である。比丘比丘尼優婆塞優婆夷と云ふ四通りの衆の師であるぞ、それが直に佛の道の此上もなき規則であ

ると仰せられた。七歳の女流と云ふことは、勝曼經に友稱國王が七歳以上の男女を悉く集めて佛緣を結ばしめた故事があるのである。さて又此の身此のまゝで此世の衆生を濟度して、未來は果してどうなることかと云ふに、第二十節に於て、

第二十節

若し菩提心を發して後、六趣四生に輪轉すと雖も、其輪轉の因緣皆菩提の行願となるなり、然あれば從來の光陰は設ひ空しく過すといふとも、今生の未だ過ぎざる際だに急ぎて發願すべし。

六趣といふは、天上と人間と修羅と餓鬼と畜生と地獄とのことで、六道とも云へば六凡とも云ふ。一體佛道の修行と申すものは、此の六凡を出離して、聲聞と圓覺と菩薩との三つの階級を上り、それから佛に成ると云ふのが普通一般の說であるが、今此

の宗の安心は、此身此儘でそのやうな階級に拘はらず、天上でも人間でも修羅でも地獄でも、因縁次第で衆生濟度をするのであるから、未來に何處へ生れても少しも怖る る所は無い。凡そ生物が生るゝのに、胎生と申して人間や犬猫などのやうに母の胎内で形が正しく備はつて生るゝのもあれば、卵生と云ふて鳥や魚のやうに卵で生るゝのもあり、又濕生と申して蛞蝓などのやうな生れやうもあり、或は化生と云ふて蠶が蝶に生れ代るやうな種類もある。それを胎卵濕化の四生と云ふのであるが、設ひ何處へ何様な生れやうをして、或は人間或は地獄、乃至餓鬼修羅と其處此處へ輪轉と申して生れ代りあるいても、其の生れ代り死に代りするのが、皆衆生濟度の大願を行ふ因縁になるぞよと仰せられるのである。尤も受戒入位の人の身の上は、必らず本の人間に生れて來るのであると云ふことは、後の第二十一節で委しくお話いたすことになるが、先づこゝでは總體の上に就ての道理を示させられたものである、

さて斯様なわけであるに依て、設ひこれまで懺悔とも受戒とも噂に聞くべき因縁も無かつた時は致しかたも無いが、已に斯様な因縁の熟した上は、片時も早く自未得度先度他の願を發すがよいぞと繰り返しての お勸めである。其上にも尙ほ御懇切に、

設ひ佛に成るべき功德熟して圓滿すべしといふとも尙ほ廻らして衆生の成佛得道に回向するなり、或は無量劫行ひて衆生を先に度して自からは終に佛に成らず、但し衆生を度し衆生を利益するもあり。

と仰せられて、自未得度先度他をお勸め下さるゝ。設ひ自分からは求めんでも、三十二相を具足した妙覺果滿の成佛をすべき因縁が熟して來るかも知れねが、それも自分では受けないで、一切衆生に廻らし與へて遣はすがよい。現在大菩薩方の中にも、

觀世音菩薩などのやうに「無量劫行ひて衆生を先に度して自らは遂に佛に成らず、但衆生を度し衆生を利益する」方もあるではないかとの御教訓である。觀世音菩薩と申すは、全く過去世には正法明如來と申して、成佛得道なされたお方であるさうだが、衆生濟度の爲めに持と菩薩の身と現はれ、何時までも成佛はせず、或は在家の身とも なり、或は出家の身ともなり、色々種々の身を現じて衆生を濟度すると云ふ大願の樣子は、普門品に委しく說かれてある通りのことである。されば吾々受戒入位の身も、觀世音菩薩を好い手本にして、自分は長く佛に成らないで、衆生濟度をせねばならぬ、八相成道の佛にはならぬても、觀世音菩薩の通りになつたら何の不足があらうぞ。不足どころか其方が一層高尙な道理であるが、餘り長くもなるし且つ餘程解り難くもなるから、先づこれまでにしておいて、然らば其の衆生濟度を云ふは如何なることを爲るのかと云ふに 朝な夕なに爲ること作すこと、百姓は百姓のまゝ、町人は町

人のまゝ、昨日も今日も替りはないけれども、たゞ昨日までは爲ること作すこと己れの私欲私利のみが目的で、鍬鎌も取れば算盤を彈いたのが、受戒入位の今日となつては、爲ること作すことが皆悉く衆生濟度のため、多くの人々に安樂を與へたい、世の中に佛の光りが輝いて眞理を悟る人を殖したい、言葉を換へて申せば、人一人も多く受戒入位の人が殖えよかし、發願利生の仲間が多くなるやうに、それにつけても先づ第一に貧は諸道の妨げであるから、國も富み家も榮え、身體が健康で無い時は衆生濟度も勤めにくい、學問知識が足りないでは衆生濟度に不自由である、斯の如く一切萬事皆悉く衆生濟度と云ふことが眼目になるに依て、心の置き所が、昨日と今日と替つたまでのことである。さりながら斯く道理の上からばかり申したのでは、多くの人の標準が立たぬに依て、これから次の第二十一節には菩薩の四攝法と云ふことをお敎へになる。

第二十一節

衆生を利益すといふは四枚の般若あり、一者布施、二者愛語、三者利行、四者同事、是れ卽ち薩埵の行願なり、

先づ初めに其の名目だけを示された、四枚といふは四通りと云ふまでのこと、般若と云ふは佛の智慧の事であるから、尊い法の通稱と思へばよろしい。第二十七節に「般若を尊重するが故に」とあるも此の例である。「薩埵」といふは、菩提薩埵を略したので、菩薩といふも、菩提薩埵を略したのであるから、つまり今薩埵といふのも菩薩と同じことであると思へば濟む。一體菩薩といふことは、大乘の佛法を信ずる者の總名であるから、お互ひに佛戒を受けた者は皆菩薩に違ひない、お婆さんでもお爺さんでも、受戒した者は皆菩薩であると心得ねばならぬ。「行願」といふは、「行は身業

の作事、意業の觀機、二つの者は菩薩の本道、鳥の双翼の如し」と華嚴の合論に說てある、つまり菩薩たるの心懸と行業と申すのである。其の心懸くべき事、行ふべき事が四つある、卽ち四攝法であるが、委しいことは正法眼藏に示させられてあるに依て、今は僅に其の要を摘んである。

其布施といふは貪らざるなり、我物に非ざれども布施を障へざる道理あり、其物の輕きを嫌はず、其功の實なるべきなり。

これは四攝法の第一である、布施と云ふは、天竺では檀那と云ひ、日本ではほどこしと云ふ。ほどこしと云ふても、乞食などに物を與へることばかりでは無い。又布施と申しても、坊さんに錢を進ぜることばかりでは無い。承陽大師は其の定義を御一

言に「貪らざるなり」と仰せられてある。他の人師の一寸云へない斷案である。貪らぬのが布施の第一であるに依て、自分の持つてゐる者を人に與へるばかりでは無い、他の物を欲しがらぬのも施しの一分である。且つ他の物を欲しがらぬにせよ、自分の物を他に與へるにせよ、其の物事の多少には拘はらぬ、たゞ相手の人に眞實の利益が有るか無いかと云ふだけのことに氣をつけねばならぬ。十重禁戒の中へ此の布施を配當すれば、不偷盜戒と不慳法財戒とが正しく布施の當體で、不邪婬戒も亦た之に當る。

さて其の布施を次の段で、

然あれば卽ち一句一偈の法をも布施すべし、此生佗生の善種となる一錢一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆す。

これは財法二施の樣子をお示しになる「一句一偈の法をも」とあるは法施の方で、凡そ何事でも自分の知つてゐることを惜まずに人に敎へるのを法施と云ふ、佛敎の道理などを敎へ傳へるのは勿論のこと、往來で道に迷つて居る人に方角を敎へて遣るのも法施の一分である。世の中に有りと有らゆる多くの人々を、皆自分の弟子である生徒であると思はねばならぬ、自分が一切衆生の導師であると云ふことを忘れてはならぬ。次に「一錢一草をも」と云ふ方は財施である。鏑一厘でも藁一筋でも、人の爲になることなら何でも施す、世の中に有りと有らゆる多くの人を、皆自分の子であると思はねばならぬ、自分が一切衆生の慈父であると云ふことを忘れてはならぬ。「此生他生の善種」とか、「此世他世の善根」とか仰せらるゝのは、老婆心から甘やかしたお言葉である。善種だの善根だのと云ふのを、自分の功德のやうに思ふてはならぬ。法界平等の善種善根、自他を泯じて見るがよろしい。此の文相の上だけでは、たゞ至つて

輕い施しでも功德があると云ふことを示させられたまでのことであるが、重い方から申せば亦た限りも無い。國家の爲に正當な法律を立てゝ、多くの人民の安寧幸福を計ると云ふやうな事も、法施の重なる部分である。又國家の爲に身を捨て家を捨て妻子までも振り捨てゝ、多くの人々の安寧幸福を謀ると云ふやうなことも、財施の重なる部分である。

倘ほ此外に無畏施と云ふことがあつて、財法無畏の三施と申すことを說くのであるが、今此では無畏施のお示しは無いけれども、自然此中に籠つてゐると見てよい。無畏施といふは、其人の知識・慈愛・力量などが多くの人の恃みになり力になつて、大勢の人々が安心をすると云ふやうなわけである。大きく云へば佛菩薩のお力を憑みて、何も畏るゝ所が無くなる、小さく云へば仁君賢相が一國民の力になる類、もつと小さく申せば小兒が自分の親を頼みにするやうなもので、これが皆謂ゆる無畏施である。

觀世音菩薩を施無畏者と申すのであるが、我々お互ひも亦た皆應分の施無畏者とならねばならぬ。

法も財なるべし財も法なるべし、但彼が報謝を貪らず、自からが力を頒つなり。

前に財施と法施を並べて示させられたが、今度は其の財法二施を互に圓融させての御教訓である。法施が財施になることもあれば、財施が法施になることもある。例へば自分に學問が無ければ、人に學問を授けることは出來ぬけれども、學資を與へて學校に入れて學ばせるやうにしたら財施が直に法施である、此に於て自分で敎へたと少しも違ひは無い。又金錢こそ無いに依て施すことは出來ぬが、斯々然々にすれば金錢が手に入るぞと云ふことを敎へれば、其のお庇で先の人が財を得ることもある、それ

が直に法施が財施である。すなはち自分で金錢を施したと少しも違ひが無い、たゞ其の施しをする時に、此方の心の置き所一つが尤も大切である。

智慧の足りない人や衣食に乏しい人に、法なり財なりを施して　それを鼻にかけたり恩に着せたり、後で禮の一言も云はれたいと云ふやうな卑劣な根性では、無爲無作の布施を成就することは出來ぬ。それでは親の資格も師匠の身分も失せてしまふ。犬や猫が己れの子を育てるのでも、成長してから此子の世話にならうと云ふやうな卑しい心は持たぬ樣子である、況んや萬物の靈長と云ふ中に位大覺に同じうし了つた人天の導師、衆生の慈父が、布施を行ふて子や妻子から報酬を受け度いと云ふやうな卑劣なことが有られやうか、たゞ「自らが力を頒つなり」、天地萬物皆お互に力を頒ち合ふて生々存々して居るのである。太陽は光と熱とを頒ちて我々に光と熱とを施し、虛空は我を容れ、大地は我を載す。乃至米・麥・菜・大根等の如きは、其の全身を施して我々

の生命を維がしめてくれる。宇宙の萬象、互に其の力を頒ちて相施さぬ者は一つも無い。却て獨り我々人間は私欲に掩はれて、種々と利己主義を其間にさしはさむのは、誠に淺ましいことである。乞食に錢一文遣はしても、「有り難う御座います、おかげで助かります」などゝ情ない聲で禮を言はれ、それであゝ今日は好い善根を致したなどと自分で愉快に思ふやうでは何の所詮も無い。それでは錢一文で一つの愉快を買つたやうなものである、天地と心を一つにした者の見識にあるまじきことゝ云はねばならぬ。要する所は檀那の德を成就して、始めて人間の能事畢ると謂ふべきである。

舟を置き橋を渡すも布施の壇度なり、治生産業固より布施に非ざることなし。

前には一錢一草と云ふやうな小さくて直接なお示しであつたが、今度は大きくて間

接な布施の仕方で、海川へ橋を架けたり渡船を置いたりするのも布施の檀度である
ぞと仰せられる。「檀度」と云ふは、檀は檀那を略したので、前にも申した通り施しと云
ふことの原語である。又度と云ふは波羅蜜と云ふ天竺の言葉を支那の言葉に譯したの
で、つまり檀度の二字で布施の行ひと申すことになる。「舟を置き橋を渡す」と申して
も、唯無賃で旅人を渡らせると云ふやうなことばかりではない、設ひ相當な賃錢を取
る蒸氣船や鐵道でも、其事を發起して其業を成就させた人の心懸一つで、其の商法が
直に布施波羅蜜である。そこで「治生産業固より布施に非ざること無し」と云ふお示
しが肝要になる。治生産業と云ふは、人々各自が農業なり商業なり、渡世の業務を營
むことである。渡世の業務そのまゝが其の營む人の心懸一つで悉く布施の功德にな
る。然るに心懸一つの違ひで、何程の金錢や米麥を貧民などに施しても、却てそれが
利己主義の商法や名譽を誇る廣告にばかりなるのが多い。それだから古人は陰德とい

ふことを尊ばれたものである。今の世にも隨分陰德者は有らうけれども、名利の人が
多いから餘程覺束ない。尤も世の中に公然知れるやうでは陰德ではないから、知れな
い所に多くあるのであらう。陰德と云ふは、其の布施を受けた人にも知れないやうに
布施を行ふことであるから、其の布施を受けた人は誰にも禮の申しやうが無い、禮の
申しやうが無いけれども有難さは益々深く感ずるから、天地の間に向つて誰ともなし
に禮を言ふことになる。天地の間に向つて誰ともなしに有難いと感謝された功德は、
即ち天地の功德となる。全く自分のした事ながら、其のまゝに天地の功德となる、
それが直に自分が天地と其の德を同じうしたのである、誠に分り易い明らかな道理で
ある。第二十二節は、

第二十二節

愛語といふは、衆生を見るに、先づ慈愛の心を發し、顧

愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懷ひを貯へて言語するは愛語なり、

これは四攝法の第二で、十重禁戒の不妄語戒・不說過戒 不自讚毀他戒・不瞋恚戒は皆これに當る。さて此の一段は、愛語の定義を明さるゝので、意業と口業との二つに掛けて示させられた、愛語と云ふは愛らしい物言振りと云ふことであるから口の上に罹つたことには違ひないが、其本はと云へば全く心懸が第一であるに依て、「先づ慈愛の心を發し」とある。然らば其慈愛の心と云ふは何なる心かと云ふに「慈念衆生猶如赤子の懷を貯へ」と示させられた、謂ゆる常住佛性の慈悲心である。慈念衆生猶如赤子と云ふ八字は法華經の提婆達多品で、文殊菩薩が八歳の龍女を稱讃させられたお詞で多くの人に慈悲心の有ることは恰ど母親が赤子を視る樣であると云ふことである。八

歳の龍女さへ此通り、況んや我々相當に年もとつて居る而も人間の身で有れば、慈愛の心を深く貯へて物柔らかに物を言はねばならぬ、さて其物言の有樣を大略申さば、

徳あるは讃むべし、徳なきは憐むべし、

凡そ對手の人に少しでも好事が有たなら、其れを讃める樣にするが宜しい。何なる人でも何か其人の得手が有るものである、其得手の所を讃めて置て、其れから追々導びいて懺悔受戒の眞實の人にして遣らねばならぬ。諛び阿ねる爲めや、自分の私欲の爲めに人を讃めるのでは無い、母親が赤子に對つて「善い子だから惡いことを爲るのでは無いよ」と云ふ樣にするのである。赤子に阿ねり諛らふ親は有るまい、若し又其人に何も讃める所が無いとした時は、惡い子ほど益々可愛いと云ふのが親心である。「徳なきは憐れむべし」と言ふは其點である。

怨敵を降伏し、君子を和睦ならしむること、愛語を根本とするなり。面かひて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす。面かはずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず。愛語よく回天の力あることを學すべきなり。

この一段は愛語の功德をお示しに成る。「口は是れ災禍の門」と申す俚諺の通り、物言ひ一つで敵にもなれば味方にも成る、世の中に喧嘩口論と云ふことの有るは、皆物言から起る災禍である。小にしては身をも亡ぼし、大にしては國をも亡ぼし天下の億兆人民を塗炭の苦に沈めるのも多くは物言の善惡が破れの端緒である。一言以て國を興し、一言以て國を破ると古人の言はれたのは此である。されば慈愛ふかき一言を聞て是までの怨敵が自ら慚ぢて降參して來ることにも成る、こゝに君子とあるのは儒者の

謂ゆる有德の君子のことでは有るまい、有德の君子なれば和睦せぬはずは無い、謂ゆる在位の君子で、王公貴人の類を申すので有らう。王公貴人と云ふ類の人は、多く我慢が强くて人に負けまいと思ふ心から和睦が出來ぬ。其れを能く攝し導びくに愛語を以てすれば國王と國王と戰かつて居たのが互ひに軍をやめる樣なことも有る。支那の春秋戰國ごろなどの歷史から例話を引て來れば幾らも面白いのが有るが、次に「面ひて愛語を聞くは」と云ふ以下のお示しは、實に人情を穿たれた親言親口である。顏と顏と見合せて居て、やさしく言はるれば御世辭で有らうと思ひながらも、惡い顏する者もなければ厭な心持になる者も無いことは勿論であるが、其れよりも蔭で好く言ふて居るそうであると人傳に聞たときは、身に染々と感じて其れほどまでまでに私を好く思ふてくれるかと思へば、肝にも魂心にも浸み渡るに違ひない。

昔し支那の趙と云ふ國に藺頗と云ふ大將が有つた、然るに藺相如と云ふ人が昇進し

て、廉頗より上の位に成たのを廉頗が憤ほりて、武人だけに腕力で折が有たら藺相如を辱しめやうと思ふて居る所が、藺相如は廉頗と一處に成りそうに思ふ時には、毎々病氣不參で出勤せぬ樣にして居つた。然るに或時思ひ掛けない途中で廉頗の影を見ると、藺相如は直に車を引返して遁げてしまふた。流石に藺相如の家臣の者は殘念に思ふて、何故に斯く廉頗將軍をお避けなさるのかと問ふた所が、藺相如が言はるゝには、今秦と云ふ恐ろしい强い國が跋扈しても我が趙の國へ未だ手を出さぬのは、全く彼の廉頗と私が居る故である。然るに若し廉頗の憤ほりに抗抵して、私と廉頗が戰ふことに成ては、最早や此國を保つことは出來ぬ。實に廉頗は此國の爲めに大切な將軍で有るに依て、彼人の憤ふりを增させぬ樣にせねば成らぬと言はれた。其れを聞て家臣等が感服したのが、いつと無く風說に成て廉頗の耳にも入たものと見え、廉頗が後悔したこと一通りで無い。遂に自分と自分の背に荆を負ふて藺相如の處へ詫に往き、

此廉頗は私憤の爲めに國を忘れてお前を憎んだ罪人で御座る、どうぞ此荆でお打なされて下されと云ふたとある、誠に好い例證であつて、愛語の功德は此通りである。同天と云ふは物事の天然自然に斯くなければ成らぬと定まりたることは、人の力で何とも動かし得べきことでは無いが、其れをさへ引回して天然自然の物事をも動かすと云ふ意味を回天と云ふのである。今は其を敵味方と立分れて戰ふほどに命さへ惜まぬ恨みも、愛語の力で和睦させ喜ばせるに譬へて、愛語能く回天の力ありと仰られた。菩薩の行願を心懸る者は、よく〳〵箇樣な道理を學び心得て居らねば成らぬぞとの御敎訓である。

第二十三節

利行といふは貴賤の衆生に於て利益の善巧を廻ら

すなり。

第二十三節は四攝法の第三、利行と申すことの定義を明かされる。衆生と云ふ時には其人の身分が富貴でも貧賤でも其れに構ふことでは無い。然るに大方の人の考へでは、利益を與へるとでも申せば、何やら自分より目下の者だけに對して言ふことの樣に思ふ向も多く有らうが、其うでは無いことを顯はす爲めに特に貴賤の衆生と仰せられた。利益と云ふは、何事に限らず人の爲め國のため天下の爲め等になることを總て云ふのである。善巧と云ふは、方便とも善權とも申すので、人の爲めにもせよ國のためにもせよ、利益を施こすには色々臨機應變の方便を廻らさなければ成らぬ、善巧を廻らすと云ふことを平たく言へは、手際よく物事を出來すことで有る。

窮龜を見、病雀を見しとき、彼が報謝を求めず、唯單へ

に利行に催ふさるゝなり。

この一段は利行の心懸を事例を擧げて示させられた、窮龜の事は晉書列傳に在る話で、昔し晉の世に名は孔愉字は敬康と云ふ人が有つたが、或時餘不亭と云ふ處で、或人が龜の子を籠へ入れて持て往くのを見た。何うするのかと尋ねたところが、殺して喰べるので有ると答へた。其時孔愉は何にも愍然なことで有る、私に賣てくれと申して、相當に錢を遣はし龜の子を水へ放して遣つた。龜は嬉しそうに泳ぎながら左の方へ首を傾けては孔愉の方を四度まで見回りて、遂に水底へ潜つて仕舞ふた。然るに其龜が後に孔愉へ大層な恩返しをしたと云ふ話（其恩返しの事は第二十八節で分る）。

又病雀と云ふは、續齊諧記と云ふ本にも對偶日記と云ふ本にも出て居る話で、昔支那に楊寶と云ふ人が有て、九歳の時に華陰山と云ふ處へ遊びに往つた處が、一羽の雀

が鴟梟と云ふ強い鳥に搏たれて飛ぶことが出來ず、樹の下に墜ちて蟻に責められて居るのを見たから、子共心にも可愛そうに思ひ、蟻を拂ひ除けて宅へ連れて來て、箱の中で養なつた。ところが百日ほど經つと、羽毛も舊の通りに治つたに依て箱を開けて飛ばせて遣つた。然るに其雀が後で大層な恩返しをしたと云ふ話（これも第二十八節で分る）。

偖その孔愉が餘不亭で殺される龜を見た時にもせよ、又揚寶が華陰山で負傷した雀を見た時にもせよ、決して後の恩返しなどを當にした譯では無い、唯何となく憫然に思ふ一念、知らず〳〵利行の菩提心に誘引されたので有るぞとの御示しである。

昔から八福田と申して、佛弟子の勤むべき箇條と定まつて居る八つの中で義井を堀りて旅人に水を供養すると云ふ事と、橋を架けて人に渡らせると云ふ事と、道の惡い處を平にすると云ふ事の三つは前の布施の中に入り、父母の孝行と三寶の供養とは後

の行持報恩の中へ入るとして、後の病人を憾れむのと、貧乏人を救ふのと（これは布施をかねる）、畜生を助けるのとの三福田は、全く此利行の中に攝めらるゝことになる。福田と云ふは福を作る田と云ふことで、其秋穫は皆自分の所得に成る、然るに慈悲心の無い者は、唯自分の欲にばかり目が眩むに依て、其れを氣の毒に思し召されて次の御教訓が有る。

愚人謂はくは、利他を先とせば、自らが利省かれぬべしと、爾には非ざるなり利行は一法なり、普ねく自他を利するなり。

佛祖のお慈悲は斯う云ふものである。受戒入位の身の上とは申しながら、流石に凡夫の習氣が拔けぬに依て、自分の利をば棄てゝ仕舞へ、恩返しを受けやうとは思ふなと

ばかり申したならば「其れでは善根つんでも樂みが無い」と云ふ樣な愚痴を起すものも有らうと思し召し、此お示しが有るのである。「利行は一法なり、普ねく自他を利するなり」と仰せらるゝ。利行と云ふことは、自分の爲めだの他人の爲めだのと云ふ別々の法では無い、盡十方法界唯一法の利行であるに依て、一利行を行なふ毎に盡十方法界皆其利益を依むる。そこの道理は前の第十七節の處などを考へ合せて見れば能く分るはずである。譬へば此に百軒の村が有るとして、其村の一軒の主が己れの家だけに火事火難の無い樣にと幾ら心配して自家の家の火の用心に氣をつけても、毎晩寢ずに夜廻りをしても、隣から出火して類燒しては誠に何の所詮も無い。然るに村中に火事火難のない樣にと心懸け、村中互ひに心を合せて氣をつければ村中といふ中には自分の宅も必らず外れずに籠つて居るから、他人の事と思ふが直に自分の利益である。偖又箇樣に人の爲め國の爲め社會の爲めに利行を勤めるには、是非とも前に申した善巧方便

が大切で有るが、其善巧方便の第一として、同事と云ふことを知らねば成らぬ。乃ち第二十四節に、

第二十四節

同事といふは不違なり、自にも不違なり、他にも不違なり。

これは四攝法の第四で、此一段は先づ同事と云ふことの定義を示させられた。不違と云ふはそむかぬといふ事たがはぬと云ふ事で、其の背かぬ違はぬと云ふは隨ひ連れ添ふことである。隨ふと云ふは今濟度して遣はさうと思ふ人の爲ること作すことどんな事でも其れを厭はず嫌はずに先の人と同じ事をするのが第一の方便で觀音の三十二應身の樣にするのである。然るに其濟度しやうと思ふ人に隨ふて背かぬと云ふには

先づ第一自分で自分に違かぬ様にせねば成らぬ。其道理を自にも不違なりと申すのである。同事を說くに他にも不違なりと云ふことは大方の人も云ふが、自にも不違なりと云ふことは他の人師の言ひ得ぬ所で是が承陽大師の超越せられた見識である。實にお互ひ自分で自分に違かぬことが出來れば、生れて人たるの能事畢ると申しても過言では無い。流石に何なる人間でも自分の本心を尋ぬれば、惡いことを好んで善いことを嫌ふ者は無い。然るに私慾に掩はれて本心に違ひ自分に背き、一旦惡業に慣習が着けば、最早其惡心と同事に成るから天地と同事の本心を失ふて佛祖にお欺きを掛けるのである。

譬へば、人間の如來は人間に同ぜるが如し

同事の例證を示させらるゝに誠に高尙なお話である。現に釋迦如來は兜率天に在したと云ふに、我々人間を濟度なさらう爲めに娑婆往來八千遍、遂に我々人間と同じ人間の淨飯王のお子に御誕生、我々人間と何も彼も同じ樣に、八十年を人間社會に送られた、之に勝る同事の例は外に無い。人間の如來は人間に同ぜらるゝと仰せらるゝお詞の中に、おのづと天上の如來は天上に同じ、地獄の如來は地獄に同ぜらるゝと云ふ意味の含んで有ることをも研究して置たいものである。

他をして自に同ぜしめて、後に自をして他に同ぜし
むる道理あるべし、自他は時に隨ふて無窮なり

これは同事の自他圓融を示させられた。同事と申したからとて必らず此方からばかり先方へ同じて往くものとは限らない、却て先方を前に此方へ同ぜしめて、其れから後に此方が先方へ同じて往くことも有る。其れは其時の都合に依て何れにしても宜し

いと申さのである、他をして自に同ぜしむるの例證は外に求むるには及ばぬ。

海の水を辭せざるは同事なり、是故に能く水聚りて
海となるなり

これが誠に好い例證である。大海は細流を擇ばずと云ふ通り何なる穢れた流でも、どんな細い溝川でも、又黄河・恒河・楊子江のやうな大水でも、少しも擇ばず隔てなく皆懐中に容れるゆゑ世界に二つと比ひなき大海と成るので有る。是れは大海の方から溝や河の姿に同じたわけでは無い却て溝川の方から海の方へ同ぜしめるのである。諸佛如來の十方衆生を平等利益せらるゝ様は、全く大海の細流を含容する如くで有る。

偖又正法眼藏の四攝法の卷には、此文の次に箇様の文が有る、「明主は人を厭はざるが故に其衆を成す、人を厭はずと雖も賞罰なきには非ず、賞罰ありと雖も、人を厭ふ

こと無しと有る。今この修證義には略して載せられなんだが今日の時勢に尤も緊要なお詞で且つ文相も能く分るのであるから、お互ひに記憶するとも書附て置くともして具さに研究したいもので有る。凡そ世の中は皆同事の一行で成就する道理は、前の第十四節の處で感應道交のお話を致したのを、參考せらるゝが宜い。天地萬物皆同事し生生々存々するものである。次に第二十五節は、發願利生の結文である。

大凡菩提心の行願には是の如くの道理、靜かに思惟すべし、卒爾にすること勿れ、濟度攝受に一切衆生皆化を被ぶらん、功德を禮拜恭敬すべし。

文のまゝで能く分るから別に講辯にも及ぶまい。要するに此發願利生の一章は、前來しば〳〵申す如く、常住佛性が我々の身の上に慈悲心孝順心と顯はるゝ其中の慈悲

心が三歸三聚十重禁戒の傳授に催ふされて現に是の如く顯はれたので有るから、此次の行持報恩と鳥の兩翼の如く、車の兩輪の如く朝な夕なの心懸を怠たらぬ樣にするが何よりの肝要である。偖次が、

第五章　行持報恩

これも前來しば〳〵申す常住佛性に二樣は無いが、且らく假りに差別して目下に對しては慈悲心と云ひ目上に對しては孝順心と云ふ。今は其孝順心を報恩と名け其報恩は行持の外に無いことを明かすのが此章の本意である。其實は發願利生の外に行持報恩は無い、行持報恩が直に發願利生である。然りながら已に當成の佛と云ひ、已成の佛と云ひ、又佛祖と名け衆生と名くる上は、諸佛に對する心得が無ければならぬ。詞をかへて申せば、前の發願利生は子に對する利益の行持、この行持報恩は親に對する報謝の發願、互に圓融無礙の中に又規律の相侵さゞる所ありて、始めて常住佛性の本

體を全うすると云ふものではある。行持と云ふ詞は、一體華嚴經の中に佛の十一持と云ふことを說かせられた、其中の一つで有るとか申すことで、其解釋に依て見れば「一切殊勝の妙行を勤修すること無量無邊にして恒に厭足せざる、是を行持と名く」と云ふことである。然かし今は其んな解釋はどうでも宜しい、其定義は第二十九節の通りに信ずれば足りる。第二十六節、

第二十六節

此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり

報恩の行持は、第一其本を忘れぬが肝要である。世間の敎でさへも報本反始を孝行の定義とする、況んや佛祖の自孫たる者が其本を忘るゝ樣では仕方が無い。十方法界は廣くとも三世諸佛は多くとも、我々お互ひが現在本師と憑み嫡々相承の戒法を受け

たのは全く釋迦如來の御教に依る。然るに其釋迦牟尼佛は、世界多き中にも此娑婆世界に國土も數ある中に、此南閻浮提しかも六道四生色々の衆生多き中に別して我々と同じ種類の人間に御降誕なされて下されたればこそ、斯く易々と我々が受戒入位も出來たのである。然らば其入位の上に發す所の菩提心も利生の爲めには六道四生ゑらぶ所は無き筈なれど、本を思ひ始を顧りみれば、必らず此娑婆世界の南閻浮洲、中にも今の學問で委しく成つた地理の上から申せば、此地球内亞細亞洲が我が大恩教主たる釋尊の故蹟ゆゑ、是非この亞細亞の人間に生々世世生れて來て有緣の人々を先づ濟度し、其れから五大洲中にも他方世界にも、異類の衆生にもと心懸るが報恩の第一着である。偖この御文の上には南閻浮とのみ仰せらるれど、更に此意を推擴げて考へて見れば、同じ釋迦如來の遺法とは申す中にも現在我々お互ひが授かる戒は日本曹洞の高祖たる承陽大師それに次では孤雲徹通の兩大師及び太祖と稱せらるゝ常濟大師等の御

代々御相承に依るのであると知たなら同じ亞細亞と云ふ中にも高祖太祖の御跡を慕ふて是非とも、大日本帝國に生々世々の因緣を結びたいと云ふ發菩提心が無ければ成らぬ。然らば曹洞宗の信者たる人々は固より別に他方世界の極樂などを願はぬのみか、直に此大日本帝國を衆生濟度の本部と定め、其れから十方世界にまで佛法弘通するので有ると云ふとを、能く〳〵信じて疑がはぬ樣にせねば成らぬ。

今是の如くの因緣あり願生此娑婆國土し來れり、見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや。

「今是の如きの因緣あり、願生生娑婆國土し來れり」と云ふは過去世から現在までの有樣を申すのである。現に我々お互ひは此娑婆に生れたいと思ふ因緣が有たればこそ、斯くの如く此娑婆へ生れて來て居るでは無いかと云ふ意味である。「見釋迦牟尼佛

を喜ばざらんや」と云ふは現在の有様から未來まで掛けて見るが宜い。現に此娑婆へ生れて來たればこそ、釋迦牟尼佛を拜むことも出來て、末世ながらに常住佛性の戒體をも發得することが出來たのである。然らば未來生々世々釋迦牟尼佛を拜むため此娑婆世界へ生れて來ることを喜び勇まなければ成らぬ。

「娑婆」と云ふは天竺の詞で、索訶とも娑訶とも書く。其の索訶或は娑訶とも云ふ事を、支那語に譯せば能忍とも堪忍とも忍土とも忍界とも申すさうである。佛敎では此茫々たる虛空の間に幾億萬とも數の知れぬほど世界が多く有る、其世界毎は一人の佛が敎主と成て居らるゝから極樂世界は阿彌陀佛、瑠璃光世界は藥師如來と云ふ樣なわけで卽ち此娑婆世界は釋迦如來お受持の世界である。其娑婆の中に又三千大千世界が有るが現に我々が生れて居る處は其中の一世界の中の又四分一の南閻浮と申すので、閻浮と云ふは樹の名を國の名にしたので有るとか申すこと、是等の事は都て天竺の古代

からの說で、釋迦如來は古說のまゝお用ゐなされたものだそうである。然りながら此虛空間に百千の日月ありて百千の國土あり、國土あれば悉く佛あり衆生ありと云ふ樣なことは、釋迦如來の道眼で御達觀の通り、今日學理の愈〳〵開くるに隨つて、每夜大空に數限り知られぬ星が槪ね日輪で有ると云ふことも分つて來た。此後學問の進步次第いかなる事を發明して、愈々佛說の實證を顯はすかも知れぬ、行末たのもしいことで有ると思ふ。

第二十七節

靜かに憶ふべし、正法世に流布せざらん時は、身命を
正法の爲に拋捨せんことを願ふとも値ふべからず、
正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし。

前節の喜ばざらんやと云ふ詞を受けて、其喜こぶべき譯を示させられ、且つ其恩を報ずるに就ての心得を敎へられた。設ひ我々が此娑婆の南閻浮へ生れて來たにもせよ、釋迦如來出世の前で有るとか、又は佛法破滅の後で有るとか、つまり世に正法の行なはれぬ時代に生れ合せたならば、何に命を懸て佛法の爲めに盡したいと思ふても、其詮は無いで有ろう。然るに今我々は斯く易々と受戒入位の身と成たのを喜ばんければ成らぬ。又他人にも我我の通り正法に逢ふことを願はせねば成らぬぞとの意味である。

見ずや佛の言はく、無上菩提を演說する師に値はんには、種姓を觀ずること莫れ、容顏を見ること莫れ、非を嫌ふこと莫れ、行を考ふること莫れ、但般若を尊重するが故に、日々三時に禮拜し恭敬して、更に患惱の

心を生ぜしむること莫れと、

此に「佛の言はく」と仰せらるゝのは、何經のお說やら調査が屆かぬけれども此一段は現在說法を聞く師匠に事ふる上の心得方を擧げられて、種姓や容顏や行狀は何なる人か分らんでも、眞實に佛敎の話をして下さるゝ人にさへ遭ふたらなら佛に事ふる通りに禮拜恭敬供養せよとのお示しで有る。況んや釋迦如來を始め高祖太祖の如き佛佛祖々の大恩をやと、そこの處を次の節に連續しての御敎訓である。「無上菩提」と云ふことは、菩薩地持經などに七無上と申して無上の意味を七通りも說てあるが、詮り此上もない有難い佛法といふまでの事。「種姓」と云ふは、天竺の癖として人の階級が嚴しく立ち中々身分の無い者は犬猫同樣に扱はるゝ風が有たそうで有るから、釋迦如來は殊更に人權を重んじさせられ、種族や氏姓を論ずることを深く戒められた。又「容顏」

と云ふは顔貌や形容、師匠と憑んで物を聞くに其んな事を構ふには及ばぬ、阿那律尊者は盲目で有たが、肉の眼こそ見えね、天眼通を得られたと有る。世間の上でさへ猿よ猿よと笑はれた藤吉郎が世界無比の豪傑では無いか。行ひを考ふること莫れ、これだけは前の種姓や容顔とは違ふて、誰でも直に考へることに成る。不品行な坊さんの説教を聞ても有り難く無い彼の人は斯〳〵の事をした、此の人は然〳〵の事があるなどゝ、先方を責める心ばかり先に立つが凡夫の常で有るが、其れは誠につまらぬことである。今誰になりとも法を聞くのは、法が目的で説く人が目的では無い。譬へば銀行から金を受取るに頭取か或は支配人の手から受取らぬでは受取た甲斐が無い、丁稚や小僧が持て來た金では通用がしないで有らうと言ふ者が有たなら、誰でも其愚を笑ふで有らう。今説法をする人が發明した法では無い、先佛の護持したまふ所曩祖の傳來したまふ所であるから、取次人は誰でも宜しい。尤も其人が行狀堅固な人なれば尙

更に有難いには違ひないけれど、其れは其人の方の事で、こちらには關係ないと云ふことを能〳〵合點せねば成らぬ。正法眼藏の辨道話に「佛在世にも手毬に依て四果を證し、袈裟を掛けて大道を明らめし、俱に愚暗のやから痴狂の斎類なり、唯正信の助くる所、惑を離るゝ道あり、痴老の比丘の默坐せしを見て、設齋の信女さとりを開きし、是れ智に依らず文に依らず、言を待たず、語を待たず、唯正信に助けられたり」と有る示などを能〳〵味はひて見て、たゞ般若を尊重する心得に成らねばならぬ。般若と云ふは前に申した通り佛の智慧と申すこと「日々三時」と云ふは朝と晝と晩と云ふことで、毎日幾度もと申すほどの事と心得れば宜しい。其外の文相は能く分る。次に第二十八節に移りて、

第二十八節

今の見佛聞法は、佛祖面々の行持より來れる慈恩なり、佛祖若し單傳せずば、如何にしてか今日に至らん、一句の恩尚ほ報謝すべし、一法の恩尚ほ報謝すべし、況や正法眼藏無上大法の大恩之を報謝せざらんや。

この文は前節を承けて、現在一座の說敎を聞く上に就ても、前節の通りに心得ねば成らぬ。況や「今の見佛聞法」はと移る文勢である。文相は能く分るが、現に我々お互ひが今箇樣に釋迦牟尼佛を拜みたてまつり、且つ其遺法の中にも別して嫡々相承の戒法を受ることの出來ると云ふは。全たく釋迦如來より迦葉尊者、それから阿難尊者、商那和修尊者と代々相續二十八傳して達磨大師、それから又二十三代經ちて高祖承陽大師、更に四傳して太祖常濟大師、それから五哲二十五哲各々嫡々相承して今日迄

に至る間いづれも面授口訣と申して皆直々に傳へられた。若し此代々の佛々祖々に報恩利生の行持が無つたならば、どうして今日まで此の通りに傳はることが出來やうぞ、實に佛祖の行持に依て今日我々が受戒入位が出來た其御恩の廣大なることは譬へん樣も無い。僅に一句の道理を聞ても其恩は報ぜねば成らぬ、僅に一法の傳授を受けても其恩は報ぜねば成らぬ、況や今受けた大恩は正方眼藏無上大法を受けた御恩である、其れを報ぜずに居られませうかと仰せらるゝ。正法眼藏と云ふことを前にも何遍も申してあるが、彼れは皆承陽大師がお書貽し下された書物の名である。今又こゝで正法眼藏と云ふのは、早く申せば佛法の一番に正しい大切の眼目と云ふべき所と云ふほどの意味で、昔し釋釋如來が迦葉尊者を第一のお弟子と定めさせられ、即ちお形見のお袈裟までお授けに成つたとき、正法眼藏涅槃妙心實相無相の法門を其方に附屬するぞと仰せられた、それから己來前に申した代々の祖師方が皆その正法眼藏を傳へられた

ので、現に今懺悔受戒の儀式に依て在家の男女にまで授けらるゝ戒法も、すなはち其正法眼藏無上大法の重なる部分である、誠に一方からぬ大恩であると云ふことを肝に銘じて置かねば成らぬ。

病雀尚を恩を忘れず、三府の環よく報謝あり、窮龜尚ほ恩を忘れず、餘不の印よく報謝あり、畜類なほ恩を報ず、人類爭てか恩を知らざらん。

この事は前の第二十三節にも有た話で、楊寶が華陰山で拾ふて來た病氣の雀を介抱して達者に成てから放して遣つた處が、其夜寢てから夢の如く現の如く黄色の衣裝を着た童子が枕頭に現はれて、拙者は先頃より御介抱を蒙つた雀で御座るが、實に貴郎の御恩に依て危い命を助かりました是れは聊かお禮の印にと云つて白い玉の環を四つ

楊寶に渡し、君の子孫の潔白なること此玉の如く、又三公の位に登ることも此環の數の通りで有らうと申して往たが、其後楊寶の子の楊震また其子の楊秉、その子の楊賜、その子の楊彪と四代續いて三公の位に登つた云とふ事が蒙求にも出て居る。又窮龜の方は、是も第二十三節で申した通り晉の孔愉が餘不亭で龜を助けた後に圖らず天子の勅を受けて其餘不亭の領主に成たに就て、餘不亭侯の印と云ふ龜を紐に附けた印形を金で鑄させた所が、龜の首が左へ傾いて居るに依て造り直させたが、復た元の通り首が左へ曲る。都合四度鑄直させて、四度とも曲る。然るに其首が先年放した龜が後を四度見返つた時の形と誠に能く似て居る所から、偖は彼の龜が命の助かつた恩を報ずる心で、斯る不思議を顯はすので有るかと氣が附たに依て、首の曲つた儘其印を用ゐたと云ふことが是も蒙求にも出て居るが、設ひ其事實は有たことにもせよ、造つた話にもせよ、斯る畜類の中にも恩を知つて報謝する者が幾らも有る。犬などが主人の恩を

報じたことは、支那日本は勿論西洋にも澤山ある様子である。況んや人間たる者が恩を知らんでどうしませうぞ。殊にお互ひ諸佛同様の位に入た身で、其入位の大恩を荷且に思ふて成りませうか、身を粉にしても骨を碎いても報謝したてまつらねば成らぬ。然るに今佛祖の御教訓に依れば、身を粉にせよとも抑せられず、骨を碎けよとも仰せられぬ、乃はち第二十九節に、

第二十九節

其報謝は餘外の法は中るべからず、唯當に日々の行持其報謝の正道なるべし。

乃はち、廣大なる佛恩を報謝するには、何なる難儀なことかと思へば、外の事を何程しても報謝には成らぬ。唯其日〳〵の努めが眞實に行持と名けらるゝ樣になるの

が、報謝の正しき道である。行持と云ふは前にも鳥渡申した通り、如來に十一持あると云ふ中の一つで、早く申さば爲ること作すことが皆佛法を持つ力に成るのを行持と申すのである。然らば我々お互ひが、其日其日を何樣に送れば宜しいかと云ふに、

謂ゆるの道理は日々〳〵の生命を等閑にせず、私しに費さゞらんと行持するなり。

偖此一段が行持報恩の眼目である。日々〳〵の生命を等閑にせぬのが行持であるぞと仰せらるゝ、等閑にせぬと云ふは虛爲にせぬことである。我々お互ひが生れてから死ぬるまで、設ひ出家にせよ在家にせよ町人にせよ百姓にせよ、等閑に暮さぬ日は幾日か有る。人間僅か五十年と申すが、十五六歳までは夢中で過ごし、其れから幾らか物事に氣が付たとしても、三十四五年の光陰は日にして僅に一萬一二千日、其一日の三分

の二は寢たり遊んだりして暮すので、つまり實際三四千日に足るか足らぬ我々の生命、着ること食ふことにのみ追ひ廻され、古人も已に言はれし如く、飽食暖衣逸居して其れで教が無い日には、禽獸に異ならぬぞと云ふ責を免るゝ者は、世の中に幾人あるか。己れや己れの妻子眷屬、僅かな自分の身に添ふた五人や十人の人のために着たり着せたり食たり食せたりする位な事で、謂ゆる禽獸同樣な日暮しをしては、人間に生れた甲斐が何處に在る、其れを名けて生命を等閑にすると云ふのである。然らば何樣に日々の生命を使ふのか、私しに費さざらんと行持するのである。私しと云ふは自分勝手の事、自分の勝手だけならば犬猫でも自分の欲は在る、西洋の先哲も人は社會的の動物で有ると言はれた樣子、凡そ人間と生れたからには社會いはゆる多くの人々が寄り集りて、持ちつ持たれつして世を渡るので有ると云ふ位の事は知らねば成らぬ。況んや法界平等の慈愛心孝順心を顯はして利生報恩の他他事ない身の上、爲るべと作すこ

と私しに墜ちぬ樣、皆悉く衆生濟度と心掛くれば、前にも吳々申した通り、治生產業みな布施で、昨日にかはらぬ家業商賣その儘利生の行持と成る。詞をかへて申して見れば、前章に返す〳〵御教訓のあつた發願利生の心掛に怠たりさへ無ければ、其れが直に報謝の正道である。

第三十節

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆し、何れの善巧方便ありてか過にし一日を復び還し得たる、徒らに百歲生けらんは恨むべき日月なり悲むべき形骸なり。

日々〳〵の生命を等閑にしては成らぬぞと云ふことに付て、更に一日の光陰も容易なら

ぬことを示させらるゝ。是は前の第二節第三節等に照應して考へて見るが宜しい、文相に分らぬ所は無い、光陰と云ふことは前の第二十節にも有たが、光は日光陰は夜陰で、つまり晝夜と申すことである「方便」は梵語で漚和倶舎羅と云ふさうだ。方便は其譯語で、維摩經の方便品の註に肇法師の說は「方便と云ふは智の別用である」と言てある。淨名疏や法華の文句などにも色々の事を申してあるが、つまり此ではどんな手立をしたからとて一旦過して仕舞ふた光陰は二度と引戻し樣が有るかと云ふまでの事である。前にも申した通り着たり食たりするだけの事に、犬猫同樣光陰を送るならば、百年生きたからとて生きた甲斐は無い、淺ましい形骸といはねば成らぬ、恨めしい月日といはねば成らぬ。

設ひ百歲の日月は聲色の奴婢と馳走すとも其中一

日の行持を行取せば、一生の百歲を行取するのみに非ず、百歲の他生をも度取すべきなり。

佛とも法とも知らなんだ昔の事は今更致し方も無い、設ひ是まで長い間の月日は目の前の事にばかり追使はれて空しく過ごしたにもせよ、僅に一日だけでも眞實に行持らしい行ひの出來る日が有たならば其一日が百年も空しく過ごした長い間の迷を取戻すことが出來る。唯この世一生の取返しが附くばかりでは無い、此世の命が終つた後の未來永劫までも、唯一日の行持の功德で自他の濟度をすることが出來るぞとの意味である。世間の敎でさへも、朝に道を聞けば夕に死すとも可なりと言てある。況や如來嫡傳の正法に遭ふて、一日なりとも眞實に利生報恩の行ひが出きれば、百歲や一生はおろかなこと、過去の過去際より未來は未來際まで、一時に濟度することが出來る

に違ひない。「聲色」と云ふは聲は耳の所對、色は眼の所對、眼にもろ〳〵の色を見る耳にもろ〳〵の聲を聞く、好聲だとか厭な色だとか云ふ心が起る其れが一切妄想の端緒である。そこで聲色の二字を煩惱妄想の惣代に擧げられ、我々お互ひが其煩惱妄想に追使はれて、好聲だから再度聞たい厭な色だから二度と見たくない、旨いから食たい奇麗だから着たいと、其んなことにばかり御奉公して居る樣は、まるで煩惱妄想の雇人同樣の姿である。其れを「聲色の奴婢と馳走す」と仰せらるゝ。然るに今は一日の行持を行取することが出來る身となれば、實にせめて萬物の靈長たるに耻ぢぬことになつたのである。そこで

此一日の身命は貴ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此行持あらん身心、自らも愛すべし、自らも敬ふべし。

前の一段は行持ある月日の貴ときことを示し、此一段は行持ある身の貴きことを示させらるゝ。行持なき身は悲むべき形骸で有たが、已に行持ある身と成りては、自分ながらに自分のみの私しの身では無い、一切衆生の導師たるの身である、一切衆生の慈父たるの身である、自分ながらに愛せねば成らぬ私しに愛すのでは無い、愛と云ふは慈悲心の事である。自分ながらに敬はねば成らぬ、私しに敬ふのでは無い敬ふと云ふは孝順心の事である。何ぜかと云ふに、

我等が行持に依て諸佛の行持現成し、諸佛の大道通達するなり、然あれば即ち一日の行持是れ諸佛の種子なり、諸佛の行持なり。

我々が今一日の眞實の行持あるは、畢竟過去現在の諸佛から其種子を受け繼だ行持

である。譬へば過去現在の諸佛の行持が親で、我々の行持が其子である子がありてこそ親の德も顯はるゝので、子が無ければ親の家も立たぬ。そこで我々の行持が諸佛の行持を現成させる道理も分る、又諸佛の大道は我々の行持に依て通達するのであると云ふことも顯はれる。偖又我々が親の種子を受繼で今日の行持が有る通り、我々の行持が亦た未來の諸佛の種子となり、未來の諸佛の行持を顯はすに違ひない。若し我々の行持が無ければ、過去以來の諸佛の種子が絶えるのみでは無い、未來の諸佛の種子を傳へる者も無いことに成る。箇樣なわけで有るに依て我々の行持は決して我々一人の事では無い、實に十方三世の諸佛に於て佛種子の斷續に大關係あるのであるから、自らも愛さねば成らぬ、自らも敬はねば成らぬ、偖〳〵最尊無上なる身の上に成つたのである。次には愈々結文の

第三十一節

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり、過去現在未來の諸佛、共に佛となる時は、必ず釋迦牟尼佛と成るなり、是れ卽心是佛なり。

この一節は修證義の結文で、前の第一節と照應し又第十六七節あたりと參考して伺がはねば成らぬ。尤も之を曹洞宗の專門學の上から、碧巖集や從容錄などを提唱する樣に評論する日には、どんな事でも申しませうが、修證義の上では他を顧みる必要は無い。諸佛と云ふことは前々からしば〳〵申すことであるが、殊に懺悔滅罪受戒入位は畢竟何の爲めで有るかと云ふに、我々衆生が凡夫生死の仲間を拔けて諸佛涅槃の仲間に入らうと云ふだけの事である。其れに就ては凡夫衆生の持前なる生死煩惱それを其儘諸佛の本分たる涅槃菩提と心得よと仰せらるゝのが第一節の趣意で有るが、口で

言ふことは譯も無いが、實地に生死煩惱を其儘涅槃菩提とすることは中々難かしい。そこで三世因果の道理から業報相續の樣子を聞き、懺悔滅罪せねば成らぬと云ふ心が起り、偖三業淸淨に成た上で佛祖正傳の戒法を受け、始めて諸佛の位に入り、位大覺に同うし了つた上は、爲ること作すこと諸佛の仕事で、發願行持と顯はれた、其功德が三世に涉り十方を貫いて、諸佛の種子ぞと云ふまでに成たのが、第一節から第三十節までの御敎訓である。

そこで諸佛〳〵と申すのはどういふことかと尋ぬるのが最初からの目的で且つ結局の問題である。然るに諸佛といふは、釋迦牟尼佛のことであると仰せらるゝ。十方三世に何ほど多くの諸佛が有りても皆釋迦牟尼佛である。何ぜかと申すに十方三世の一切諸佛は皆釋迦牟尼佛の化身で有るからである。一體は佛に三身と申して法身と報身と化身との差別が有るが、法身の時は毘盧舍那佛と稱へ、報身の時は盧舍那佛と云ふ

法身の事は且らく措て、報身の盧舍那と云ふのは、現に我々が受け得た所の戒法は全たく盧舍那佛のお說で有ると申すことである。梵網經の首に「我れ今盧舍那まさに蓮華臺に坐す」とある、然るに其盧舍那佛の坐せられた蓮華臺の周匝に千弗と申して數多き蓮華が有て、其蓮華每に一の釋迦牟尼佛が坐し、又其一華に百億の國が有て、一國に一釋迦あると說かせられて有る。これは何なることを仰せられたものかと云ふに、平たく申して見れば、天竺の悉達太子とお生れなされた釋迦牟尼老和尙が、其報身の御德で乃はち「我今盧舍那まさに蓮華臺に坐す」と仰せられ、常住佛性の慈悲心孝順心卽ち十重禁戒等をお說きなさるゝときは、之を拜聽し之を傳受し之を行持して諸佛の位に入る者が百千萬億數限りも知られぬ程多く出來る。其諸佛の位に入つた者が十方三世の衆生を濟度する有樣は各々其れ〴〵の緣に隨ひ機に臨みて種々の善巧方便も有り樣々の姿形も有らうけれども、皆釋迦牟尼佛の化身で有るぞと申すことであ

る。何ぜかと云ふに百千萬億の諸佛は、皆こと〴〵く釋迦牟尼老和尚の御口から化生した諸佛如來である、これを古人は「釋迦老人口輪轉の諸佛菩薩」と言はれて有る、更に詞をかへて申せば十方三世の一切諸佛と云ふは皆釋迦牟尼佛の分身分體で有るぞと云ふほどの事である。偖又箇樣に申せば直に其釋迦牟尼佛と云ふ言葉の尻に今度は附き纏ふて、然らば天竺の悉達太子が、一つの身體を幾百萬にも分けると云ふのが、怪しい話であるなどゝ狼狽する愚人が出來るに依て、更に仰せらるゝには「釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり」とある。十方三世一切諸佛の本體で有る釋迦牟尼佛と云ふは外には無い、卽心是佛である。卽心と云ふは、我々お互ひの心のまゝと云ふことである。我々お互ひの心のまゝの外に釋迦牟尼佛も無ければ三世諸佛も無い、法華經には「一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まざるときは」いつでも釋迦如來が八萬の大衆と俱に出現するぞと說せられて有る。一心が直に釋迦牟尼佛を生み出す

母で有ると云ふことが分らねば成らぬ。箇樣なわけであるに依て過去の諸佛でも現在の諸佛でも乃至未來の諸佛でも、「佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり、是れ卽心是佛なり」と仰せらるゝ。佛に成ると云ふのは其本體の釋迦牟尼佛に成ることで、釋迦牟尼佛に成たことを卽心是佛と云ふのである。更に詞をかへて申さば、我々お互ひの一心が釋迦牟尼佛の佛心と一致すれば、釋迦牟尼佛の千百億化身が、直に我々の一心を運轉して、直に十方三世の衆生を濟度することに成る。そこで我々の一心が三世諸佛で、三世諸佛が釋迦牟尼佛であると云ふことになる。箇樣に申して見れば此次に起て來る疑團は、

卽心是佛といふは誰といふぞと、

問ひ掛て來る、此疑問は、

審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん。

と仰ふせらるゝ。さて其卽心と云ふ心は誰の心で何樣な心で有るぞ、我々お互ひの心のまゝだの又は一心だのと云ふことは前にも申してあるが、其の一心とか心のまゝとか申すのは、一體如何なる心であらうぞ。其の心の穿鑿の屆いたのが、正しく佛祖の廣大なる慈恩を報謝する本分であるぞとの御教訓である。

さて切角第一節から第三十一節迄、斯樣に親しく御相談を致して來て、こゝで躓いては面目ない話であるなどゝ申せば、何やら外に說がありさうだが、何も外に說のあるべき樣は無い。修證義全篇五章三十二節を通貫する心、卽ち常住佛性の慈悲心孝順心が直に佛である、此心が時としては淨信とも誠心とも信心とも名けらるゝ、生死の中に此心があれば、生死は無い、それが卽ち所謂生を明め死を明め得たのである。

一心歸命南無常住佛性慈悲心孝順心、生々世々値遇頂載。

後語

雲心水迹七十四年。偶〻客中に病を獲てより、一枕五載。而かも尙ほ筆に舌に傳道布敎の微力を傾倒して倦まざりし家翁が、病間勗めて別に兒孫のために講說せるもの、亦た實に二三にして止まらず、或は皇謨聖旨の大要を衍義し、或は眞空妙有の玄理を俗詮し、特に宗意を談じ、祖風を述べたるもの、隨時之を筆錄し來りて、此に修證義講話一篇を成すに至らしむ。仍て先づ家翁に示し、其の口授加朱を乞ひて只管全きを期し、私に宗乘參究の資糧と爲すを喜べり。何ぞ知らん是れ家翁は其の示寂に先つこと僅に三旬の頃にして、願れば實に最後の說誡たりしなり。今や上木に際して當時を追懷すれば、溫容彷彿として眼前に在り、慈言猶ほ耳底を去らず、思慕の念轉た切なるを覺ゆ。あゝ家翁が、一意尊皇奉佛の生涯は、蓋し皇道の宣傳と宗風の擧揚とに在りしが如し。冀くは本講話の讀者は、機會を以て先著「敎育勅語要解」をも併せ一閱されんことを。校正を終るに際し、數言を列ねて、此書の成れる緣由を記すこと如是。

大正十一年佛誕生聖日　　大內青巒識

修證義講話 終

大正十一年七月二十五日印刷
大正十一年七月二十八日發行

修證義講話
定價壹圓七十錢

著者　故大内青巒
編輯人　大内俊
發行者　今村延雄　東京市芝區露月町十八番地
印刷者　米山加茂吉
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十七番地

不許複製

發行所　東京市芝區露月町十八番地
電話　芝二千二十七番
振替口座　東京二九七九番
鴻盟社

◀禪門必需の書◀

禪門寶鑑
叢林必携
來馬琢道師著
洋裝全壹冊　定價金貳圓八拾錢　送料金拾貳錢

禪門公案大成
訓譯古則全集
乙部魁芳師著
曹洞宗務院御編纂
洋裝全壹冊　定價金參圓五拾錢　送料金拾八錢

曹洞宗宗制法規類纂
曹洞宗務院御藏版
洋裝全壹冊　定價金參圓　送料金拾八錢

洞上行持軌範
改訂增補
來馬琢道師著
洋裝全壹冊　定價金壹圓五拾錢　送料金八錢

禪學活問答
問答二百則
去問壹百則
忽滑谷快天氏著（曹洞宗布教文庫第壹編）
洋裝全壹冊　定價金五拾錢　送料金四錢

曹洞宗宗意私見
新井石禪師著（曹洞宗布教文庫第貳編）
洋裝全壹冊　定價金七拾五錢　送料金四錢

曹洞宗綱要
洋裝全壹冊　定價金壹圓四拾錢　送料金六錢

鴻盟社發行書目

布教資料參考書

婦女の信仰	高橋竹迷師著	洋裝全壹册	定價金壹圓五拾錢 送料金八錢
山水と人物	高橋竹迷師著	洋裝全壹册	定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢
十善要集	上宮教會編（歐洲戰亂平和記念出版） 水野靈牛師著	洋裝全壹册	定價金壹圓 送料金八錢
御詠歌說教	西國三十三所 日證點仙禪師著	洋裝全壹册	定價金九拾錢 送料金六錢
人物養成と禪	加藤咄堂先生著	洋裝全壹册	定價金壹圓五拾錢 送料金八錢
修養清話	加藤咄堂先生著	洋裝全壹册	定價金七拾錢 送料金四錢
婦女の修養	加藤咄堂先生著	洋裝全壹册	定價金七拾錢 送料金四錢

鴻盟社發行書目

布教資料參考書

修證義說教軌範	增補 新井石禪禪師著	洋裝全壹册	定價金貳圓八拾錢 送料金拾八錢
因緣百話	布教資料 吉村雄鳳師著	洋裝全壹册	定價金壹圓五拾錢 送料金八錢
四恩講話	傳教道覺 新井石禪禪師著	洋裝全壹册	定價金四拾五錢 送料金四錢
禪の家風	大久保太衰師著	洋裝全壹册	定價金參拾五錢 送料金四錢
永平悟由禪師法話集	峰玄光師師著	洋裝全壹册	定價金七拾錢 送料金六錢
觀音經說教	吉村雄鳳師著	洋裝全壹册	定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢
觀念の力	新井石禪禪師著	洋裝全壹册	定價金壹圓五拾錢 送料金拾錢

鴻盟社發行書目

法筵の光明

- 實驗の因緣　高橋竹迷師著　洋裝　定價金壹圓貳拾錢　送料金八錢
- 碧巖集講話　大內青巒先生著　洋裝上卷價金參圓五拾錢　下卷價金參圓五拾錢　全貳冊　送料各拾貳錢
- 大乘起信論講話　加藤咄堂先生著　洋裝　定價金壹圓七拾錢　送料金八錢
- 通俗佛教各宗綱要　來馬琢道師著　洋裝　定價金參圓八拾錢　送料金拾八錢
- 列傳體日本佛教史　各宗高僧傳　來馬琢道師著　洋裝　定價金貳圓五拾錢　送料金拾貳錢
- 金剛力　高橋竹迷師著　洋裝　定價金壹圓五拾錢　送料金八錢
- 參同契寶鏡三昧五位說　講義禪學三要　大內青巒居士著　洋裝　定價金七拾五錢　送料金六錢

鴻盟社發行書目

教科書及參考書

- 日本佛教小史　境野黃洋先生著　洋裝　定價金壹圓參拾錢　送料金八錢
- 印度支那佛教小史　境野黃洋先生著　洋裝　定價金壹圓五拾錢　送料金八錢
- 禪宗小史　境野新井共著　洋裝　定價金壹圓五拾錢　送料金八錢
- 俱舍論大綱　梶川乾堂師著　洋裝　定價金壹圓貳拾錢　送料金六錢
- 唯識論大綱　梶川乾堂師著　洋裝　定價金壹圓貳拾錢　送料金六錢
- 標註八宗綱要　黑田眞洞師著　和裝　定價金壹圓　送料金六錢
- 冠註華嚴原人論　大內青巒居士著　和裝　定價金壹圓五拾錢　送料金八錢

鴻盟社發行書目

高祖大師の暖皮肉

丘宗潭老師著

書名	裝幅	定價	送料
改訂禪戒抄	和裝全一冊	壹圓六拾錢	定價金壹圓六拾錢
正法眼藏御抄	洋裝全二冊	廿四圓	定價金廿四圓
正法眼藏私記會本	和裝全八冊	廿四圓	定價金二十圓
正法眼藏涉典續貂	和裝全六冊	十六圓	定價金八圓
冠註坐禪儀用心記合本	和裝全一冊	四十錢	定價金六十錢
永平初祖學道用心集	和裝全一冊	四十錢	定價金五十錢
學道用心集提耳錄	洋裝全一冊	壹圓八錢	定價金壹圓
普勸坐禪儀提耳錄	洋裝全一冊	六十錢	定價金五十錢
修證義筌蹄	和裝全一冊	四十錢	定價金五十錢

鴻盟社發行書目

教科書及參考書

重編曹洞五位顯訣 大內青巒居士著 | 和製全一冊 | 定價金四十錢 送料金七十錢

冠導五位顯訣元字脚 大內青巒居士著 | 和裝全一冊 | 定價金壹圓 送料金六錢

六方禮經講話 大內青巒居士著 | 洋裝全一冊 | 定價金五十錢 送料金四十錢

修證義講話 大內青巒居士著 | 洋裝全一冊 | 定價金壹圓七拾錢 送料金八錢

普勸坐禪儀講話 大內青巒居士著 | 洋裝全一冊 | 定價金三十錢 送料金四十五錢

般若心經綱要 | 洋裝全一冊 | 定價金三十五錢 送料金四十五錢

冠註注心經 | 和裝全一冊 | 定價金三十五錢 送料金四十五錢

大藏法數 | 洋裝全一冊 | 定價金拾圓 送料金十八錢

鴻盟社發行書目

教科書及參考書

冠注修證義	峰玄光師著	袖珍形全一冊	定價金貳拾五錢 送料金二錢
曹洞宗兩祖略傳	曹洞宗務院編	四六版全一冊	定價金二十錢 送料金二錢
十種勅問	曹洞宗務院編	洋裝全一冊	定價金十五錢 送料金二錢
信心銘拈提	曹洞宗務院編	洋裝全一冊	定價金五十錢 送料金四錢
正法眼藏道心卷私記合本		和裝全一冊	定價金三十五錢 送料金二錢
正法眼藏行持卷私記合本		和裝全一冊	定價金六十五錢 送料金四錢
正法眼藏出家功德卷		和裝全一冊	定價金三十五錢 送料金二錢
正法眼藏辨道話私記		和裝全一冊	定價金三十五錢 送料金二錢

鴻盟社發行書目

325
392

終